

あのハンバーグをもう一度

Narrenfreiheit

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

逸見エリカは天才少女、島田愛里寿と出会う。最初は微笑ましかつたその出会いは、逸見エリカという少女の人生の歯車を、大きく動かすこととなる……。

※このSSは某所からの転載であり、Pixivにも投稿してあります。

# 目次

第一部	あのハンバーグをもう一度	1
	初めてのハンバーグ	1
	黒森峰と少女	8
	思い出のハンバーグ	18
第二部	あの輝きをもう一度	
	倦怠な日々	29
	子供達	39
	エリカの決意	46
	太陽とハンバーグ	58

## 第一部 あのハンバーグをもう一度 初めてのハンバーグ

「愛里寿ちゃん、確かハンバーグって好きだったよね」

島田愛里寿が西住みほにそんな話題を持ちかけられたのは、冬休みに行われた戦車道合同合宿の場であった。

あの大学選抜戦からしばらくして、愛里寿はみほと個人的に交友を重ねていた。そして、季節は巡って冬。愛里寿は高校戦車道のそれぞれの隊長、副隊長を始めとした多くの優秀な隊員が集まる合同合宿にみほから誘われた。

本来なら大学生である愛里寿は参加する必要などなかったのだが、みほと戦うために高校への編入を考えている愛里寿にとって、そこで各高校の特色を掴むのいいとみほに言われ、参加することを決意した。

そういった経緯から加わった戦車道合同合宿。場所は熊本が選ばれた。西住流のお膝元であり広い訓練場が確保出来たためである。

その場で愛里寿はみほと共にその才能を大いに発揮した。まさに独壇場と言ったところだろう。

愛里寿とみほ、二人の天才が他の隊長、副隊長達にその差を見せつけて終わった合宿初日。日も落ち始め宿泊所に帰るその途中で、愛里寿はみほから突然先程の台詞を言われたのだ。

「好きだけど、どうしてそんなこと聞くのみほ？」

愛里寿はすっかりみほと名前で呼び合う仲になっていた。愛里寿にとつて、みほはもはや姉のような存在なのである。

「ふふっ、それはね。実はとっても美味しいハンバーグが食べられる場所があるんだ」

「えっ、本当!？」

愛里寿は戦車戦のときには見せないような、歳相応の表情を見せみほに問い返す。みほは、そんな愛里寿に微笑みを向ける。

「うん。宿泊所からもそんなに距離ないし、行ってみない？」

「……うん！」

愛里寿は大きく頭を振って答えた。

その愛里寿の姿を見て、みほもまた嬉しそうに愛里寿の手を繋いで宿泊所への道とは違った道を歩いて行った。

愛里寿は期待に胸を膨らませた。

——一体どんなお店に連れて行ってもらえるだろうか。みほが言うのだからきつととても凄いいお店に違いない。ああ、考えるだけだからお腹が鳴りそうだ。

そんなことを考えながら愛里寿はみほに連れられて歩いていたが、次第に不思議に思い始めた。みほが連れてきたのは様々な店が立ち並ぶ大通りではなく、明らかに住宅街の方へと歩いて行ったからだ。隠れ家的な店なのだろうか？　とも思ったが、とてもそんな店がありそうな場所ではなかった。

そして、ついにみほはとある場所で立ち止まった。そこは、他の家よりも大きめな家であったが、普通の一軒家でしかない。

「あのみほ、ここって……」

「まあ驚くのも仕方ないよね。でも安心して。約束は守るから」

そう言ってみほは玄関にあるインターホンを鳴らした。

すると、少ししてガチャリと目の前の扉が開く。

そこから出てきたのは、意外な人物であった。

「あら、あなた……」

「えっと……逸見、さん？」

その扉の向こうから現れたのは、黒森峰の副隊長、逸見エリカだった。

愛里寿はまったくと言っていいほどエリカと話したことはなかったが、愛里寿は合宿に参加する他の戦車乗りの名前と顔を入れていたため誰だか把握できた。

「エリカさん！　約束通り来たよ！」

「ええ……それにしても、連れてきたい子ってその子だったのね」

「うん！　愛里寿ちゃんもハンバーグ好きだって言うから、エリカさんのハンバーグ食べさせてあげたくって！」

愛里寿は少し困惑しながらもなんとか状況を飲み込む。どうやら、エリカの作るハンバーグがみほの言っていたとても美味しいハンバーグらしい。

愛里寿としてはてっきりどこかにとっておきの店があるものだと思っていたから、少し拍子抜けだった。

だが、そんなことを言ってみほの好意を無碍にするわけにも、またエリカに対し失礼な態度を取るわけにもいかないと思い、あえてそのことを口にはしなかった。

「そうなの……まあ上がりなさい二人とも。私なんかの料理でよければ、いくらでも食べさせてあげるわよ」

エリカはそう言うと、二人を家へと招きこんだ。みほが最初に上がり、その後愛里寿が続く。

そして、リビングへと案内されテーブルを前に椅子に座る。

愛里寿は横に座ったみほに尋ねる。

「……ねえ、ここに逸見さんの家だよね？ 他の家族の人は？ なんで合宿場に行かないの？」

「ああ、それはね」

愛里寿のみほへの質問が聞こえていたらしく、エリカの声がキッチンから飛んできた。

キッチンからはエリカの声と共に、ジュウウウ……という肉の焼ける音と香ばしい香りがしてくる。

「お父様もお母様も今は海外に出張中だからいないの。お姉ちゃ……姉は独り立ちしたから実家住まいではなくなったから、今この家にいるのは私一人ね。あとなんで私がここにいるかというのと、私ってああいう多人数でゴった返している場所で寝るのって苦手なのよね。幸い家が近かったから、合宿中はここから通おうって思ったの」

調理しながら語るエリカの後ろ姿はとても手慣れているのが分かり、なんだか実家の母親のことを愛里寿は思い出していた。

愛里寿の母である島田千代も、よくそうして愛里寿の好物であるハンバーグを作ってくれる。その記憶が、エリカの姿を見て愛里寿の中でふと蘇ってきたのだ。

「さあ、できたわよ」

愛里寿がぼんやりとエリカを見てみると、いつの間にかハンバーグは完成していたらしく、キャベツの千切りと共に盛りつけられたハンバーグが皿に載せられ二人の前に出される。

そして、三人分の白いご飯と味噌汁も一緒に出され食事の準備が整うと、エリカは愛里寿の正面の椅子に座った。

「それじゃあ食べましょうか。いただきます」

『いただきます』

愛里寿とみほはエリカに続いていただきますの挨拶を言う。そのまま、愛里寿は箸を手に取り、エリカの作ったハンバーグを小さく分けて口に入れた。

「……！」

そのとき、愛里寿に衝撃が走った。

じんわりと溢れだす肉汁、素材の味を活かした味わい、柔らかな舌触り、あつという間に溶けていくかのような口溶け。

それは愛里寿が今まで食べたハンバーグの中で、母のものと並ぶほどの、いやもしかしたら母のものよりも美味しいかもしれない思った、初めてのハンバーグだった。

「みほ！　これ凄い……！」

「ね？　言つたとおりでしょ？　エリカさんの作るハンバーグは凄いなだから！」

「……そこまで褒められると、なんだかむず痒いんだけど」

エリカは二人から目を逸らしながら、ポリポリと頬を掻いた。

愛里寿は、そんなエリカをキラキラとした目で見ると、

「ありがとう逸見さん！　こんな美味しいハンバーグ食べさせてくれて……！」

「……エリカ、でいいわよ」

エリカは目線を愛里寿に戻すと、小さな声でそう言った。

「え？」

「だから、エリカでいいって言っているのよ。みほのことは名前で呼ぶのに、私には苗字でさん付けっていうのもなんだか癪に障るのよ。」

だから、エリカでいいわ」

「……うん、わかった。ありがとう！ エリカ」

愛里寿は満面の笑顔でエリカに笑いかけた。

その顔に、エリカもつられたのか笑みを浮かべた。

「……そ。どういたしまして」

満更でもなさそうにエリカがそう言うと、三人は再び食事に戻った。愛里寿はどんどんとハンバーグを頬張り、念のため幾つか作ってあったおかわりをどんどんと食べていく。

また、一方で愛里寿があまり野菜に手を付けないため、エリカは野菜を食べないとおかわりを出さない、などと言ってなんとか愛里寿に野菜を食べさせるなどの一コマもあった。

そんな様子を見て、みほは「親子みたいだねー」と他人ごとのように呟き、エリカをからかったりした。

そんな風に和やかに進んだ夕食も、エリカが作ったハンバーグがすべてなくなったことによりやがては終わりのときを迎える。

皿もお椀もすべて綺麗にすると、三人は一緒に手を合わせ「ごちそうさまでした」と声を揃えて言った。

作ったのはエリカ一人だったが後片付けは三人で。

みほがそう言い出したのもあって、愛里寿とみほはエリカと共に後片付けを手伝った。

愛里寿はエリカの隣に並び一緒に食器を洗う。みほは洗い終わった食器を拭いていた。

「……ねえエリカ」

食器を洗いながら愛里寿がエリカに話しかける。

「ん？ 何かしら？」

「明日からの合宿、確か戦車の搭乗員を入れ替えるんだよね」

「そうらしいわね。なんでも交流を図ることによりそれぞれの戦車道の理論に対する理解を深めるとかなんとか……言い出したのはサンダースの隊長だったかしら」

エリカが思い出しながら言うと、愛里寿は洗っていた食器の水を切りながら言う。

「ねえ、よかつたら明日私と一緒に戦車に乗って」

その言葉はエリカにとって驚きの一言であった。島田流の次期当主であり稀代の天才少女である愛里寿から、まさか一緒に戦車に乗って欲しいと頼まれるとは思ってもみなかったからだ。

「え？ いいの？ 私なんかで」

「うん。今日美味しいハンバーグを食べさせてもらったから……っていうのも変だけど、ちよつとエリカに興味持ちちゃった。エリカって黒森峰の副隊長なんでしょ？ それも興味ある」

「そう……まあいいけどね。私も、あなたから色々と学ばせてもらいたいし」

エリカがあっさりと了承すると、愛里寿は少しばかりの笑みを浮かべ、「……よかつた」と小声で言った。

翌日、愛里寿はエリカとの約束通りエリカと同じ戦車に搭乗した。愛里寿の持ち寄ったセンチユリオンである。

乗員は他にも砲手としてプラウダからノンナ、装填手兼通信手としてサンダースからアリサが搭乗した。エリカは操縦士であった。

エリカはその身をもって愛里寿の才能を実感した。愛里寿の指揮する戦車は、他の戦車を次々と撃破し、最後には大学選抜戦のようにみほと一騎打ちになったからである。そして、その日は愛里寿が勝利を収めた。

そして驚くことに、エリカは次の日も愛里寿車の搭乗員を務めた。どうやら愛里寿はエリカのことを気に入ったらしい。結局、他の搭乗員は変わっていても、愛里寿は最後までエリカを自分と一緒に戦車に乗せ続けた。

結果、エリカは島田愛里寿という少女の能力を、他の誰よりも知ることになった。それは、みほの姉である西住まほから教えを受けたときや、みほと一緒に戦っていたときに比類するほどの衝撃だった。

一方、愛里寿にとってもそれは有意義な時間だった。高校生との交流でどこの高校に行くかを決める。今回の合宿はそのことに対し実に参考となった。

愛里寿は合宿の経験から、とうとう編入する高校を決めた。

## 黒森峰と少女

「島田愛里寿です。よろしくお願いします」

翌年の四月、愛里寿は黒いパンツァージャケットを身にまとい、同じく黒いパンツァージャケットを着て整列している隊列の前で頭を下げた。

その隊列の背後には、数々の重厚なドイツ戦車が並んでいる。

そう、愛里寿が編入先に選んだのは、他でもない西住流のお膝元、黒森峰女学園だった。

愛里寿が挨拶をすると、愛里寿の前で整列していた黒森峰の二、三年生達からヒソヒソと話し声上がる。

島田流の天才少女が西住流の影響下の強い黒森峰に編入してきた。

そのことに、疑問を持たないものなどいなかった。

だんだんと小声から声量が上がっていく。愛里寿は頭を上げ、その光景をただ眺めていた。

と、そのとき、パンパンと乾いた音がした。愛里寿の横に立っていた、黒森峰の隊長となっていたエリカが手を叩いたのだ。

「総員静かに！ 確かにあなた達の疑問は分かるわ。愛里寿は西住流ではなく島田流の出よ。でも島田流と西住流はこれを期に本格的な和解をしていきたいと考えているの。だからこそ島田流の家元も、西住流の家元も愛里寿の編入を認めたわ。それに愛里寿には妥当西住みほ、打倒大洗という目的がある。これは私達も同じ！ 同じ志を持つものとして、私達は手を取り合い戦っていくべきなの！」

『……はいー』

エリカの言葉に、それまで動揺していた黒森峰の隊員達が一気に気を引き締めた。

「ありがとう、エリカ」

訓練終了後、一人残って隊長業務をこなしていたエリカに愛里寿は話しかけた。

「ん？ ああいいのよ別に。本当のことだしね。それに、わざわざ家

元に頭を下げたみほや隊ちよ……まほさんの心遣いを無下にするわけにもいかないもの」

愛里寿の編入に関しては、実際のところかなりの苦労があった。

エリカは簡単にそれぞれが和解をしていきたいと説明したが、そこに至るまで西住姉妹や愛里寿は方方に頭を下げていた。最初は両家元もいい顔はしなかったが、本気で編入したいという愛里寿の意志を尊重する形になり、結果的に編入が許されたのだ。

「それにしても、そこまでうちに入りたいなんてねえ。他にも有望な高校はあったでしょうに？ それこそ聖グロなんてセンチュリオンが使えてよかったんじゃない？」

「ううん。私は黒森峰がよかったから。黒森峰には優秀な人員と戦車が揃っている。確実に大洗と闘うに最も適していると私は考えた」

真剣な表情で語る愛里寿に、エリカは頬をわずかに緩めた。

「真面目ねえ……あなたの戦車道に対する熱意がよく分かるわ。私もそれに答えられるように頑張らないとね」

「大丈夫だよ。エリカなら」

「言ってくれるわねえ」

自信満々といった様子で言う愛里寿に、エリカは思わず苦笑いをした。

エリカはそのまま視線を手元にある資料へと移し、隊長業務へと戻っていった。

カリカリとペンの走る音と、カチカチという時計の音が静かな空間に響く。黙々と作業をしているエリカの横で、愛里寿は手を後ろで組みながら立っていた。

「……帰らないの？」

とうとう我慢ができなくなりエリカが口を開く。そのエリカの質問に対し愛里寿は、

「うん。終わるまで待ってる」

とさも当然のように答えた。

「はあ……分かったわよ。なるべく早く終わらせるから。それでその後私の部屋に来なさい。晩御飯作ってあげる」

「……ありがとう」

根負けしたため息混じりに笑うエリカに対し、無邪気そうにはにかむ愛里寿であった。

翌日から、愛里寿は本格的に黒森峰の訓練に参加した。

初めは愛里寿が島田流であることに反感を持っていた隊員達もいたが、いざ愛里寿がその技術力、指揮力を見せると、誰もがその感情を口にするをやめた。いや、まずそんな感情を抱くことができなくなった。

愛里寿は間違いなく、黒森峰の中でトップの実力であった。その腕前は、隊長であるエリカをはるかにしのいでいることは、誰の目にも明らかであった。

愛里寿は一年でありながら、そうそうに車長の座を与えられた。

「凄いです！ 島田さん！」

「さすが島田流の次期家元。やるなあ」

訓練を終え戦車から降りた愛里寿の元に多くの隊員達が集まってきた。学年に関係なく集まった隊員達は皆、口を揃えて愛里寿を褒め称えている。

「ありがとう」

愛里寿は詰め寄られるのに慣れているのか、集団の中でも冷静に対処した。

幼い外見に似合わぬその冷静さが良かったのか、愛里寿を取り囲んでいた隊員達はさらに熱が入る。

「ねえねえ島田！ いや島田さん！ 私に車長としての心構えとか作戦指揮のコツとか教えて下さいよ！」

「あつ先輩ズルいですよ！ そういうのはまず後輩の私に譲ってくれていいんじゃないですか！」

「私もお願い！ 私外部から入ったから右も左も分からなくてー」  
「えつとちよつと待つて……」

さすがに同時に教えを乞われると対処に困るのか、愛里寿は片手を上げて周りを一旦静止させようとする。しかし周りの隊員達は一向

に止まる気配はない。どうにも高校生のパワーというものは大学生とは違い歯止めが効かないものらしく、愛里寿は今まで体験したことのない熱意に襲われた。

どうしようかと愛里寿が目を泳がせていると、パンパン！と手を打ち合わせる音が響き渡った。その場にいた全員が音の方向に目をやる。そこにいたのは、エリカだった。

「はいはいそれまで。愛里寿が困っているじゃない。愛里寿への質問は後で一人ずつゆっくりと時間を作るわ。愛里寿もそれでいいでしょう?」

「あ、うん」

愛里寿がコクンと頷く。エリカの言葉に、その場にいた隊員達も納得したようだった。

「それじゃあみんな一旦バラけなさい。それぞれまだやることがあるでしょう?」

エリカの言葉で愛里寿に群がっていた隊員達は散っていった。

そして愛里寿とエリカの周りから人が殆どいなくなった後、愛里寿はエリカの元に駆け寄った。

「エリカ、ありがとう」

「いいのよ別に。隊員達のことを気にかけるのも隊長の仕事だからね。それにしても凄い人気ね。私あんなに質問攻めにされたことないわよ」

エリカが若干眉を垂らしながらも笑顔を浮かべる。

「エリカは隊長だから。あと私が物珍しいからみんな聞きに來ているだけ」

愛里寿はエリカの微妙な表情の変化に気づかぬまま、表情を変えずに言った。

エリカは愛里寿がそう言うとは何故だかふふつと笑いを零す。愛里寿にはどうしてエリカが笑ったのかが分からなかった。

「エリカ?」

「いいえ、なんでもないので。それより早く移動するわよ。この後練習後のミーティングなんだから」

「あ、うん」

エリカが愛里寿にくるりと背を向け歩き始めると、愛里寿はその背中を駆け足で追っていった。

それからの訓練の日々において、愛里寿が学年問わず隊の中心なのは変わることなかった。誰もが愛里寿と同じ戦車に乗りたがり、誰もが愛里寿から教えを受けようとした。

それは練習初日から数えて二週間ほど経ってから行われた新入生中心の紅白戦において、愛里寿を隊長としたチームが完勝を収めてからより一層顕著になった。

その紅白戦後、エリカはひとつの決断をした。

「私を副隊長に？」

「ええ、お願いできるかしら」

エリカはその日の訓練が終わった後、愛里寿を個別に呼び出していた。

愛里寿は椅子に座りながら告げられたエリカからの言葉に特に驚いた様子もなく、いつものように冷静な表情を浮かべていた。

「それは問題ないけど……大丈夫なの？」

「大丈夫って……何が？」

「いや、高校は大学と違って学年での上下関係が厳しいってお母様が……」

愛里寿がそう言うと、エリカは片手を口に当てながら静かに笑った。

「くすっ、あなた、上下関係って誰に対しても口調変えないじゃないの」

「いやそれは、もう癖みたいなもので……」

確かに今更言うことではないのかもしれないと、愛里寿はすこしばかり慌てた様子を見せた。

愛里寿のそんな様子を見ると、エリカはさらに面白そうな顔で愛里寿を見た。

「大丈夫、気にしなくていいわ。もともと副隊長になる予定だった上

級生も、あなたにぜひ副隊長を任せたいと言ってきたのだから」

「……そうなの？」

「ええ、あなたの實力は隊のみんなが認めるところよ。これであなたを平隊員のままでいさせたら、それこそ私がバツシングを浴びるわ」

「そういうことなら……受けるよ、その話」

「あなたならそう言うってくれると思っていたわ。ありがとう愛里寿」

そう言いながらもエリカはどこか安心した様子で椅子から立ち上がると、そばの机の上においてあった資料を片付け始め帰る準備を始める。

愛里寿は元より帰る準備をしてからエリカの元に来たため、特に何かをする様子はない。ただ、黙ってエリカの近くに立っていた。

「それじゃあ帰ろうかしら。……今日も食べに来るんでしょ？ ハンバーグ」

「……うんー」

愛里寿はエリカのその言葉に、その日一番の笑みを浮かべて、大きく頭を縦に振った。

愛里寿が副隊長になってからの黒森峰は、以前にもまして堅実かつ強固な強さを発揮するようになった。練習試合ではほぼ犠牲を出さずに完勝、訓練においてもそのより無駄のない充実した内容でメキメキと練度が上がっていった。

誰もが愛里寿が編入したことによる恩恵を感じていた。時には隊長であるエリカ以上に指示を飛ばすことも見るようになってきた。

そうなる後に愛里寿はエリカに謝るのだが、エリカは毎回そのことを笑って許した。曰く「自分が不甲斐ないところを補ってもらっているのだから謝られるようなことはない」らしい。

しかし愛里寿は若干の罪悪感を覚えていた。何故なら、本当に僅かな、小さな声ではあるのだが、エリカよりも愛里寿の方が隊長に適任なのではないか？ という話が囁かれていたことがあったからだ。

それを聞いた瞬間愛里寿はそのことを咎めたのだが、どうにもその場だけの話ではなかったようだった。

その話はどうやらエリカの耳にも入っていたらしく、翌日愛里寿が指揮を大人しめにしたとき、すぐさまエリカから余計な気を使うなどの注意が飛んできた。

「あなたが心配する必要なんてないのよ。前にも言ったけど、私が不甲斐ないのがいけないんだから。だからあなたはいつも通りにしていなさい。それが黒森峰のためよ」

そんなことをエリカから言われたこともあり、愛里寿は自分に出来る限りのことをすることに務めた。結果、黒森峰はますます全国最高峰の強豪校として成長していった。もちろん、それに見合うほどの過酷な訓練になっていったのはいった。

そんな厳しい訓練の日々の中でも、愛里寿は定期的にエリカの元を訪れ、エリカに夕食のハンバーグをご馳走して貰うことだけは止めなかった。

もはや、それはエリカと愛里寿の日常と化していた……。



「黒森峰女学園の勝利！」

会場に高らかと黒森峰の勝利を告げる宣告が響き渡る。

第六十五回戦車道全国高校生大会の二回戦、サンダース大学附属高校との戦いに黒森峰は勝利した。

サンダースの物量と情報戦を活かした戦い方を戦車の性能と戦術で圧倒しての勝利だった。

一同が整列し礼をして、それぞれの陣地へと戻っていく。

その途中で、愛里寿は多くの黒森峰の隊員に囲まれていた。

「さすがです副隊長！ あそこで見事フラッグ車を撃ち抜くとは！」

「あれは砲手の腕が良かったから。私は指示を飛ばしただけ」

「いいえ副隊長の陣取りと相手を誘い込む作戦がなければああもうまくは行きませんでした！ さすがです！」

愛里寿は多くの賞賛の声を浴びている中、申し訳無さそうに背後を振り向いた。

そこにはエリカの姿があった。エリカはその様子をただ笑顔で眺めている。

——確かにその場で指揮をとったのは自分だ。だが全体の指揮と作戦を立てたのはエリカだ。

それに愛里寿は知っていた。大会で当たる相手高校が決まってから、エリカは自由な時間や睡眠時間を削って相手の研究や戦略、戦術の組み立てをしていたことを。その結果愛里寿はしばらくエリカのハンバーグを食べていない。だが愛里寿は決して不満をいうことはなかった。エリカが誰よりも努力しているのを知っているから。

そのエリカよりも自分が褒められているのは、あまり納得はいかない。

そんなことを考えていたのがエリカにはわかったのか、エリカはゆっくりと首を振った。

——自分の出した結果に自信を持ちなさい。

そうエリカは口だけを動かし音にはせず愛里寿に伝えた。

エリカがそう言うならば、自分は堂々としていよう。愛里寿はエリカが自分の努力をひけらかすようなことを好きではないことも知っていたから。

「浮かれるのはいいけど、まだまだ試合は残っているから気を引き締めて。次はプラウダだから」

愛里寿は自分の周りにいる隊員達にそう言い放つと、スタスタと早足で歩いて行く。周りにいる隊員達はみな愛里寿に着いて行った。エリカはその後ろからゆっくりと戻っていった。

それからの試合も、黒森峰は危なげなく勝利を収めていった。

相手はプラウダや継続など強豪校ばかりであったが、事前に入念な準備をしていたエリカの作戦と、愛里寿の天才的な指揮のおかげで黒森峰にとってはまったく障害とならなかつた。

そしてとうとう黒森峰は決勝まで上り詰める。決勝戦の相手は、愛里寿とエリカにとっての因縁の相手、大洗女子学園だった。

決勝前日、愛里寿は作戦室に籠っているエリカの元に、コーヒーの入ったマグカップを載せたお盆を持って訪れた。

エリカは大会の割り振りで、決勝で大洗と当たることが決まっただけから、次に当たる高校とは別にずっと大洗対策のことについて考えていた。それほどまでに、エリカにとって大洗は大きな障害であると言っただけでよかった。

愛里寿はトントんと作戦室の扉を叩く。すると、少し間を置いてから「……どうぞ」というエリカの声が聞こえてきた。

愛里寿は作戦室へと入る。すると、そこには大量の資料に囲まれたエリカの姿があった。その目元には、隈が浮かんでいる。

「エリカ、大丈夫？」

「ああ、愛里寿……ええ、大丈夫よ。ちよつと根を詰めすぎただけだから」

ペン片手に答えるエリカは明らかに憔悴しているといった様子だった。愛里寿はそんなエリカの元に資料のわずかな隙間を見つけてコーヒーを置く。

「とりあえず、これでも飲んで休憩して」

「ありがとう……ん、美味しい」

愛里寿は嬉しかった。自分の淹れたコーヒーでエリカが笑顔になってくれたことが。

「……明日、勝ちたいね」

ポツリと愛里寿がエリカに言う。すると、エリカもコーヒーを一口含みながら、ゆっくりと首を縦に振った。

「……そうね。あなたにとっても、明日は高校に編入した目的の相手がいるんだから。……私達は西住みほに勝たなければならない。連覇を逃した黒森峰としては、特に」

エリカのマグカップを握る指に力が入る。

だが、愛里寿はそんな僅かな変化に気がつくことができなかった。

「ねえ愛里寿」

「何、エリカ？」

「もし、もしよ。もし明日私が試合に出られなくなったら、黒森峰のことう、頼むわよ」

エリカの突然の言葉に、愛里寿は驚く。

それは、みほととの対決を心待ちにしていたエリカから出てくる仮定とは思えなかったからだ。

「エリカ、何を言ってる——」

「ごめんなさい、忘れて。……ちよつと体調が優れなくて、不安に思っただけなの。大丈夫よ、なんとか明日には体調を戻すから」

「そ、そう……」

今だ心配する愛里寿をよそに、エリカはマグカップを愛里寿の持つてきたお盆の上に戻した。

愛里寿は、それをエリカからのやんわりとした「一人にして欲しい」というサインなのだと思取った。

「それじゃあ、私行くから。明日、頑張ろうね」

「……ええ、頑張ります。黒森峰の栄光のために」

愛里寿は静かに作戦室から出て行った。黒森峰のために、エリカのために、そして何より、自分のために、みほととの戦いを思っ様々な感情で胸を熱くしながら。

そして翌日、愛里寿の元にエリカから高熱で決勝に出られないとの連絡が伝えられた。

## 思い出のハンバーク

「エリカ、卒業おめでとうー！」

季節は巡り春、訪れるのは出会いと別れの季節。  
黒森峰においても、それは例外無くやって来る。

その日は、黒森峰女学園の卒業式の日だった。

「ありがとう、愛里寿」

エリカは賞状筒を持ちながら、桜並木の下で愛里寿と話していた。  
二人の周りにも、別れを惜しむ卒業生と下級生の組み合わせがいくつも並んでいる。

中には、何人もの下級生に囲まれている卒業生の姿もあった。

「……みんな薄情。エリカは隊長だったのに会いに来る子が少ない」

「しようがないわよ。全国大会の決勝戦で熱を出して倒れた隊長なんてこんなものよ」

「でも、それはエリカが頑張ったからで——」

声を荒らげようとした愛里寿の唇を、エリカは人差し指でそつと抑えた。

「いいの。あなたにそう思ってもらえただけで、私は幸せよ。それに、あなたのお陰で黒森峰は二年ぶりに優勝することができた。みほに黒森峰の戦車道ここにありというのを見せつけることができた。それだけで、私の役目は十分果たせたようなものよ」

エリカが倒れた全国大会決勝において、愛里寿はエリカの代わりに隊長として指揮を取った。そして、黒森峰は見事大洗に打ち勝ち優勝の栄冠を手にすることができた。

内容はまさしく激戦であった。互いの戦車は次々と大破し、最後はフラッグ車同士の一騎打ちとなるまでせめぎ合った。そして、最後には愛里寿の指揮するフラッグ車がみほ指揮するフラッグ車の一瞬の隙を突き、白旗を上げさせたのだ。

「ありがとう愛里寿。これからの黒森峰をよろしくね」

「うん、分かった。エリカはどうするの？」

「私はこれから大学に進んでさらに腕を磨くつもりよ。そして、そこ

からプロリーグを目指そうと思う。あなたは高校卒業してそのままプロに行くんでしょ？」

「うん。大学卒業の資格はもう持つてるから」

あつけらかなと言う愛里寿に、エリカははははと乾いた笑い声を上げる。

「まったく、本当に天才なのねえあなたは……。それじゃあ、お互い頑張りましょう。そして、プロでまた会いましょう」

「わかった、多分私が先に行っているから、待ってるよ。エリカのこと」

「ええ、すぐに追いついてみせるわ」

そこまで話すと、エリカは愛里寿に背を向け並木道を歩いて行った。愛里寿はその背中を静かに見送った。

その日から、愛里寿は戦車道に対しより精力的に取り組んでいた。元々心から戦車道を愛してやまなかった愛里寿であったが、エリカとの別れの言葉を交わしてから、その励みぶりに一層熱が入っていた。

そのことによつて、黒森峰の戦車道はより精強さを増していった。過酷な訓練に音を上げそうになる者も出てきそうになったが、自分よりも年下の愛里寿の真摯な態度を見て殆どの者が心を改めた。

エリカからの便りは別れて以降一切なかったが、きつとそれはエリカが努力していることの裏返しなのだと言愛里寿は信じ、愛里寿もまた努力した。

一つのことには励んでいると時間というものはあっという間に過ぎていくもので、すぐさま愛里寿にとっての二年目の全国大会が訪れる。その大会でも、愛里寿は黒森峰に優勝をもたらした。観客席に、エリカの姿はなかった。

そしてさらに時は流れ、愛里寿にとって三年目の高校生活の春がやって来た。

事件は、そんな穏やかな季節に突如降りかかってきた。

「はい。島田愛里寿です」

愛里寿の元に一本の電話が掛かって来た。それは、陸の上にあるとある病院からだった。

「えっと一体私に何か……えっ!? エリカが!？」

それは、エリカが大怪我をしたとの知らせを告げる電話だった。

なんでも、エリカの電話帳には殆ど人の名前が記載されておらず、家族も海外に出張中で連絡がつかないため、仕方なく電話帳の中から連絡のつく先に電話を掛けたらしい。

愛里寿はその知らせを聞くや否や、すぐさまエリカが入院しているという病院へとヘリを使って文字通り飛んでいった。

なぜここまで焦燥に駆られるか分からなかったが、とにかくエリカに会いに行かなければと愛里寿は思った。

幸い、学園艦からエリカが入院している陸の病院からはそう遠くはなかったため、半日ほどでたどり着くことができた。

病院にたどり着くと、愛里寿はすぐさまエリカの病室へと駆けていった。途中病院の看護師に怒られもしたが、気にならなかった。

愛里寿は、すぐさまエリカの安否を確認したかったから。

階段を駆け上がり、廊下を駆け抜け、病室の扉を勢い良く開けると、そこにはベッドの上で半身を起こしながら窓の外を眺めるエリカの姿があった。

「エリカ……!」

「愛里寿……?」

愛里寿はひとまずエリカが無事なのを確認すると、ほっとしてよたよたとした足取りでエリカに近づき、どつとそばにあった椅子に腰掛けた。

「よかった……エリカが大怪我したって聞いて、私……」

「……ああ、そのことね」

エリカはまるで他人事のように呟いた。その様子に愛里寿はどこか違和感を覚えたが、とにかくエリカが無事だったことに安心して気にしないでおくことにした。

「重い物を運んでいる最中に階段から転げ落ちたんだった? しかも、ちようど高熱を出してたとか、過度な練習で体を壊していたとか

「……もう、昔からエリカは無茶ばかりするんだから」

「……そうね。色々、頑張りすぎたのかもれないわね」

エリカは窓の外を向くと、一向に愛里寿の方を向こうとしない。だが愛里寿はエリカのそんなおかしな様子に気がつくことはなかった。「でもよかったあ元気そうで……。一緒に戦車道するって約束したもののね。そうだ、去年の大会見てくれた？ 今年も去年みたいに優勝するから。三連覇して黒森峰の戦車道の強さを全国に証明するから、それでエリカも——」

「ねえ愛里寿」

少々興奮し気味だった愛里寿の言葉を、エリカは遮った。

まるで冷水をかけたような、冷たい声で。

「私ね……もう戦車、乗れないの」

「……………え？」

愛里寿はエリカが何を言っているか分からなかった。

——乗れない？ 戦車に？ 一体エリカは、何を言っているの？

「ううん。もうって言い方は少し間違ったわね。正確には、しばらくは、と言ったところかしら。私ね、階段から落ちたときにどうも強く腰をやってしまったみたいで。それで、日常生活はともかく戦車のような激しい乗り物には乗っちゃ駄目って言われたの。少なくとも、数年の間は」

「そ、そんな……。で、でも！ 数年の間なんだよね！ 時間が経てば、また戦車に乗れるようになるんだよね！」

「ええ……。でも、私はもう、戦車に乗るつもりはないから」

その言葉は、とても信じられない一言だった。

『戦車に乗るつもりはない』

——一体エリカは何を言っている？ どうしてそんなことを言う？ どうして、どうして……………？

「ねえ、どうしてそんなこと言うの……………？ 一緒にプロになろうって言ったじゃない？ ねえ、どうして、どうして……………!？」

愛里寿は思わずベッドの上のエリカの両肩を揺さぶりかかる。

すると、エリカがゆっくりと愛里寿の方へと顔を向けた。

その瞳は、濁っていた。  
暗く、昏く、濁っていた。

「……私にとつてね。みほは太陽だったの」

エリカは突如語り始める。静かに、淡々と。

「みほに近づけるように努力してきた。みほと肩を並べるようにと、頭を働かせた。みほは私にとつてどうしても手にしたい太陽だった。そのための翼を手に入れようと私は必死だった。……そんな中、あなたが現れた」

エリカの瞳が愛里寿の瞳を覗きこむ。その底なしの闇に、愛里寿は思わずエリカの肩から手を離れた。

「あなたは私が到達したいと思つた場所に突如現れた。あなたはとても眩しくて、美しくて……私はいっしか、あなたとも一緒に肩を並べたいと思つた。あなたは、私のもう一つの太陽になったの。あなたという太陽と、みほという太陽。二つの日輪が、どうしようもなく私を苦しめた。どうすれば私はあなた達の元へへ行けるのか。どうすれば私はあなた達も元へと飛翔できるのか……そればかりを私は考えていた」

愛里寿はだんだんと恐ろしくなってきた。

今まで知らなかったエリカの一面が、どうしようもなく恐ろしく思えてきたのだ。

「あのときの大会覚えている？ 私に熱を出して倒れた……」

「う、うん。もちろん……」

「あの試合ね、実は私熱なんて出てなかったのよ」

「えっ……っ？」

愛里寿は意味が分からなかった。

——エリカは過労によつて熱を出したのではないのか？ 確かに前日のエリカは、何かおかしいことを言っていたが……。

「私はあの日、どうしても私が隊長で戦つた場合に黒森峰が勝利するビジョンが見えなかった。代わりにあなたが隊長であつたときの勝利のビジョンは見えていた。でも、突然隊長をあなたにするわけにはいかない。ならどうすればいい？ そう、私がいなくなればいい。だ

から私は仮病を使ってあなたに隊長の座を譲った。今まで優勝できなかった黒森峰に優勝旗を取り戻すために。あなたという太陽とみほという太陽、二つの太陽のぶつかり合いを邪魔しないために……」

「そ、そんな……」

「そして私は大学へと進んだ。二つの太陽に近づくための翼を手に入れるために。だから私は寝る間も惜しんで努力した。努力という翼で、あなた達に近づけると信じて。……でも、いくら近づこうとしてもあなた達に届かない。別の大学で活躍するみほの、黒森峰で活躍するあなたの話を耳にして、目にするたびに、あなた達の放つ熱はより一層強くなって行って、私を遠ざけていった。でも私はそれでも近づきたかった。あなた達と、同じ空を飛びたかった。……でも、凡人が天才に並ぶことなんてできない。私が手に入れた努力という翼は、蠟細工の翼だった。太陽に近づきすぎた私の翼は、あつという間に溶けて、落ちた……」

すべてを語り終えたエリカは、どこか満足気な顔をしていた。

いや、それは言うならば諦めの境地と言ったようなものなのだろう。

愛里寿は今まで挫折する人間を見たことがないわけではなかった。大学でも高校でも、愛里寿についていけずドロップアウトするものは少なからずいた。

今のエリカは、その者達と同じ目をしていた。

「……ねえ、帰ってくれない？ もうこれ以上、惨めな気持ちにならないのよ」

「エ、エリカ。私は……」

「帰ってよ……帰ってよっ!!」

エリカの怒気を孕んだ声に、愛里寿はビクリと体を震わせ、そのまま逃げるように病室から駆け出していた。

そして、病室を出ると、急に胸の奥が締め付けられるような苦しさが襲ってきた。

——私が、私が奪ってしまったんだ。エリカの未来を。エリカは決して凡庸な選手というわけではなかった。むしろ、未来に期待が持て

る、優れた選手だった。しかし、そんなエリカを、いや、そんなエリカだからこそ、潰れてしまった。才能を見せつけてしまったことによって、潰れてしまったんだ。私と出会わなければ、エリカは、エリカの未来は……。」

「うっ、うああああああつ……！」

愛里寿はその場で崩れ落ちた。頭を抱え、大声で叫んだ。周りの目なんて気にしなかった。とにかく叫びたかった。それは、十六歳の少女にはあまりにも重すぎる罪だった。



——四年後。

「それじゃあ、私ちよつと寄り道してくるから。先に行つてて、みほ」  
「うん。それじゃあ先にホテルで待つてるね。愛里寿ちゃん」

愛里寿は高校卒業後プロリーグに入った。そして、そこでみほと同じチームに所属することとなった。

最初は元気を無くしていた愛里寿だったが、みほと交流していくうちにその明るさを取り戻していき、今ではすっかり元通りの性格になつていた。

いや、元よりも多少明るくなっているかもしれないかった。

愛里寿は今、所属するチームの地方遠征で、みほの実家があるという熊本に訪れていた。そして、翌日に試合を控えながらも、熊本の街をみほに案内してもらつていたので。

愛里寿はだいたいの道を覚えると、みほを先に帰らせ、少しばかり一人で街を散策したくなった。プロになつてからよくいろんな地方を訪れるようになったが、それでもやはり毎回見知らぬ土地を訪れるのは楽しいものである。

「それにしても、ちよつと喉が乾いたなあ……」

愛里寿はとりあえず喉の乾きを癒やすために、近くのコンビニに入ることにした。

平日の昼間とはいえ、コンビニにはそこそこ人がいた。

「つらしゃいませー……」

やる気のない店員の声が入店と同時にしてくる。

愛里寿は何気なくその声の方向を向いた。

「え……？」

そして愛里寿は、その場で固まった。

そこにいたのは、間違いない。髪を切ってはいたが、見間違えるはずもない。そのコンビニの店員は、逸見エリカ、その人だった。

「エ、エリカ……？」

エリカも愛里寿に気がついたのか、一瞬驚いたような顔をして愛里寿の方を向いたが、すぐさま視線を戻し仕事に戻っていく。

愛里寿はそんなエリカのいるカウンターへと駆け寄った。

「ねえエリカ！ エリカなんですよ!? どうして、どうしてこんなところに……!」

「……お客様、他のお客様のご迷惑となりますので……」

言われて愛里寿は周りから好奇の視線を投げかけられていることに気がつく。愛里寿は顔を赤くしながらも、小さな声でエリカに話しかけた。

「……それにしても久しぶりだねエリカ。ねえ、今までずっと何やっていたの？ 私が聞けることじゃないのかもしれないけど、その、一応心配はして……」

「……悪いけど、今は仕事だから……。ねえ、夕方時間ある？ もしあるなら、うちでなら話聞いてあげてもいいけど……」

「わ、わかった……じゃあ夕方」

愛里寿はとりあえずエリカと夕方再会する約束を取り付け、その場から一旦去っていった。

——まさかこんなところでエリカと再会できるなんて！ しかし、私は何を話そうと言うのだろうか？ あんな別れ方をしておいて、今更どんな顔をすればいいのだろうか？ とにかく、謝らないと。あのとときは逃げるように出て行ってしまったから。あのととき言えなかった謝罪の言葉を、口にしないと……。

愛里寿は頭の中で必死にエリカにどんな言葉で謝るかを考えた。

そうしているうちに、時間はあっという間に夕暮れへと流れていった。

「おじやまします……」

夕方、愛里寿はホテルを抜け出すとエリカの務めていたコンビニへと向かい、そのまま帰宅するエリカに着いて行った。その間、会話はなかった。エリカはずっと愛里寿のほうを向こうとはしないし、愛里寿も何を話せばいいのか分からなかったからだ。

ともかく、愛里寿は黙々とエリカに着いていきエリカの住んでいるというアパートへと連れて来られた。

そのアパートは非常に寂れており、築数十年といった様相だった。今にも崩れ落ちそうな錆びついた階段を上り、手前から二番目の部屋に入っていく。部屋の中も外観に負けず劣らずボロついており、また六畳とちよつとほどしかないくらいには狭かった。

そして、なによりひどいのは部屋の有り様だった。

部屋の至る所にはビールや酒の空き缶、空き瓶が転がっており、机の上にはこんもりと煙草の吸い殻が山となっている灰皿が置かれていた。

部屋の端にはその荒れた部屋には場違いな真新しい電源をつけっぱなしのデスクトップパソコンが置かれていた。

「まあ適当な場所に座っててよ。今夕食作るから」

「え？ う、うん」

愛里寿はなんとか座る場所を見つけ、腰を降ろす。ただ、お嬢様育ちの愛里寿にとって、エリカの部屋は非常に居心地の悪いものだった。

「……あの、エリカ。あのときは——」

「いいのよ別に。というか、謝るのは私のほうだわ」

愛里寿の言うことに先回りして、エリカが調理しながら口を開いた。冷蔵庫の中からすでに作っていた何かを取り出しているようだった。

「えっ？ で、でも」

「悪かったわねあのときは。変な当たり方して。私、今は感謝しているのよ。あなたのお陰で、私は自分の身の丈が分かったんだから」  
「み、身の丈……?」

ジユウ、と肉の焼ける音と臭いがする。どうやら肉料理らしい。

「そ。私みたいな凡人があなた達に並ぼうだなんて、ちゃんちゃらおかしな話だったのよ。それを勘違いして並ぼうだなんて……今考えたら馬鹿みたいよねえ。ふふっ笑っちゃうわ。凡人は下手に努力なんてせずに、自分の身の丈にあった生活してればいいのよ」

「そ、そんなこと!」

「そんなことあるのよ。あなたは天才だからわかんないでしょうけど。駄目な奴は何やったって駄目なの。私ももう腰は治ったけど、だからといってもう何かをやるうって気持ちにはなれないのよね。だから今もこうしてバイト暮らし。でもそれでいいと思ってるの。駄目人間には駄目人間の生き方ってのがあると思うから」

愛里寿は聞いていて非常に心が苦しくなった。

——今の言葉は、本当にエリカの言葉なのだろうか? 信じられない。あの毎日血の滲むような努力をしてきたエリカの言う言葉とは、とても信じられない。

「ほらっ、出来たわよ」

そう言つてエリカが愛里寿に出したのは、ハンバーグだった。

愛里寿は思い出す。そう、昔はよくこうしてエリカは愛里寿にハンバーグを出してくれていた。

まるで、ここだけあの日々に戻ったかのような、そんな気さえした。「ほら、冷めないうちに食べなさい。せつかく久しぶりに作つてあげたんだから」

「う、うん。それじゃあ、いただきます……」

愛里寿はエリカの作つたハンバーグを口にしたら。

「あっ……」

そしてその味が口の中に広がっていった瞬間、愛里寿は涙を流した。

——あの味だ。初めて食べたあの時と、エリカと一緒に切磋琢磨し

たあの日々と、まったく変わらない、あのハンバーグの味だ。

——変わらなかった。ハンバーグの味だけは、変わらなかった。

そして、それ以外はすべてが変わってしまったことをも、愛里寿は理解した。

もう、愛里寿が好きだったエリカはいない。

そう、愛里寿はエリカのが好きだったのだ。愛里寿はたった今、そのことに気がついた。エリカのが、好きだった。親愛を越え、恋愛の対象として好きだった。

愛里寿の好きだったエリカは努力の人だった。

口は悪くとも他人を思いやり、夢に向かって努力する人だった。

それが、愛里寿の好きだった逸見エリカだった。

だが、もうそのエリカはいない。

愛里寿の好きだったエリカはもう、どこにもいない。

——何処に行ってしまった？ 誰が追いやった？ それは、私だ。私が、私自身の手で、エリカを殺してしまったのだ。好きだった、愛した人を、この手で殺してしまったのだ。もう、エリカは何処にもいない。残ったのは、あの日々を懐かしむハンバーグの味だけ。

「うっ、うううう……！」

「何よ。泣くほど美味しかった？ それとも、口に合わなかった？」

エリカがそっけない様子で涙の理由を愛里寿に聞いてくる。だが、愛里寿にはそれに答えることができない。

自分で殺した相手に、あなたを殺してすいませんと、言えるはずがなかった。

だから愛里寿は泣くしかできなかった。

泣いて、ハンバーグを食べ続けることしかできなかった。

せめて唯一残っている思い出の、あのハンバーグをもう一度、味わうために。

## 第二部 ああ輝きをもう一度 倦怠な日々

ジリリリリリリ……！

「んんん……」

けたたましいアラームの音が、寝ている彼女の耳をつんざいた。眠りを遮られたことに不愉快になりながら、彼女は布団の中から手を伸ばし、アラームの発生源である目覚まし時計を手探りで探す。

顔は半分ほどしか布団から出していないため、目覚まし時計の正確な位置は分からない。そのため、だいたいの位置に手を振ってみる。その度に、空の酒の空き缶が彼女の手に当たり、カランコロンと乾いた音を立てる。その音とアルミの感触が、目覚まし時計のうるさいアラーム音と共に眠りから覚めたばかりの彼女の神経を逆撫でた。

「……ああもうー！」

苛立ちながらもとうとう彼女は——逸見エリカは布団から顔を出し、目覚まし時計を止めた。

「ふわああ……」

エリカは大きなあくびをしながら布団から立ち上がる。その姿はヨレヨレのTシャツに下着だけというなんともだらしない格好だった。

エリカはそのまま足元の空き缶を蹴飛ばしながら窓の方へと向かい、カーテンを開ける。

「うっ……」

部屋に朝日が差し込んできた。その光で部屋全体が照らされエリカの部屋の全容が明らかになる。

その有り様はあまり褒められたものではなかった。

六畳ほどしかない部屋のあちこちには酒の空き缶や空き瓶が転がり、小さなテーブルの上に置いてある灰皿にはタバコの吸い殻が山を作っている。部屋の隅には裸のゴミ袋にコンビニ弁当の空き箱が汚れたまま突っ込まれている。その部屋に不釣り合いなデスクトップパ

ソコンとテレビの近くには特に空き缶の数が多い。漫画本や雑誌も散乱しており、それらの上には埃がうつすらと積もっている。誰がどう見ても、まったく掃除されている気配がない。

「あー眠い……もうちょつとだけ寝てようかしら……」

エリカはそろそろ仕事——と言ってもアルバイトだが——の時間であるのにそんなことを呟く。

自堕落で退廃的な生活。これが今の逸見エリカの生活であった。

「つらしゃいませー……」

エリカはやる気のない声でコンビニにやってきた客に挨拶をした。結局エリカは、二度寝をすることなくしつかりとバイト先にやって来た。

今、エリカは熊本のとある場所にあるコンビニでバイトをしている。他にも働いているバイト先はあるが、今エリカがいるコンビニが一番バイトの経験としては長い。

が、その勤務態度からはあまりやる気が感じられなかった。

「……………」

エリカはレジでぼーっとコンビニに来た客を眺めている。朝方のピークも過ぎた時間帯であるため、比較的客の数は少ない。

そのため、不真面目な勤務態度でもあまり問題はなかった。

まず、同じシフトに入っている店員にもやる気が見られない。

「あーっ、えーそれはですね……」

エリカと一緒に働いている店員が、どうやら客に限定商品のことについて聞かれ、ずいぶんと面倒にしているのがエリカのいるレジから見えた。

その店員はエリカに視線を向け助け舟を求めてくるが、エリカはそれを見なかつた振りをしてやり過ごす。

わざわざ自分から仕事を増やしに行く理由はない。

そう思つての事だった。

そもそも、それくらいのは面倒臭がらずに自分で対処して欲しいとエリカは思っていた。

なぜなら、その店員はそのコンビニの店長だからである。

まずこのコンビニは店長からしてやる気がないのだ。それでも立地条件が良かったため潰れずにはいるが、コンビニの店員の態度があまり良くないと度々注意を受けるほどには全体的にはやる気が見られない店舗であった。

だが、エリカにはそれが心地よかった。

無理にやる気を出さなくていい環境が、ぬるま湯のように気持ちよかった。

決して時給がいいわけでもない。最初は覚えることが多く苦労もした。

だが、エリカはこの店の雰囲気——不真面目な雰囲気が気に入っていた。

——何かにやる気を出すなんて馬鹿のすることだ。人生なんて、適当に過ごしていればよい。

それがエリカの人生哲学であった。

エリカは、それを高校と大学の頃の経験から学んだのだ。

そう、天才に追いつこうと必死に努力していたあの——

「……やめましょう」

エリカはそこで思い出すことを止めた。

——今更思い出しても何の意味もないことだ。自分の馬鹿さ加減にほとほと愛想が尽きるだけ。

「つらっしやいませー……」

エリカはそう思い、再び脳みそを空っぽにしながら業務に戻った。

それから数時間後、エリカはその日の業務を終えると、家路についた。朝から出勤したたが、その日は予定していた他のバイトの人間が急病によつて来れなくなり、他に連絡のつく店員もいなかったため、引き続きエリカが業務を継続しすっかり空は暗くなっていた。

「つたく……あいつめ……」

エリカは来られなくなった店員に対し一人悪態をつく。

どうせ仮病だろうとエリカは思っていた。

エリカ以外の店員は、エリカよりも輪をかけて勤務態度と勤務意欲が悪いのだ。

おそらく店長もそれは分かっているだろう。だが、己もまたそうであるゆえに、そのことを咎めることはなかった。

「ただいまーつ……と、あら？」

エリカが自宅に戻ると、エリカは部屋の見違えるような綺麗さに一瞬驚いた。

散乱していた空き缶や空き瓶はそれぞれ分別されゴミ袋に入れられ、散乱していた本は整えられている。タバコの吸い殻も綺麗に掃除してあった。

そして、机の上にあるのは、ラップの掛けてあるハンバーグ。

「……またあの子来たのね……」

エリカの頭には一人の人物が浮かんでいた。

その名は島田愛里寿。

愛里寿はかつてエリカと共に戦車道の道を歩み、そしてエリカに夢を諦めさせる原因ともなった少女である。

エリカがこうなってしまうから、愛里寿とエリカは一度出会っていた。そして、そのときエリカは愛里寿に食事を作って食べさせた。

そのとき、何故か愛里寿は泣き出してしまった。その理由はエリカには分からなかった。

そして愛里寿が泣きながらその食事を食べ終わると、愛里寿はこう言い出したのだ。

「これからも、どうかエリカの部屋を訪ねさせて欲しい」と。

エリカは最初渋ったが、結局承諾した。

愛里寿とは浅からぬ仲ではあるし、もう夢を諦めたエリカについてあれこれ言わないということも約束した。ただ愛里寿は、エリカの世話をできるときに——彼女が言うには、主に試合の遠征で寄ったときに——したいと言うので、エリカはそれに甘えることにしたのだ。

実際、エリカが愛里寿に家の合鍵を作って渡してからは、エリカの生活は比較的マシになった。

少なくとも、最低でも月に一回は部屋の掃除が行われるのだから。

だが、エリカと愛里寿はなかなか顔を合わせてはいなかった。

エリカは問題ないとは口では言ったし気にもしていないのだが、なかなか時間帯が合わないのだ。

愛里寿のほうが気にしているのか、それともエリカが無意識に気にして、今日のように残業を受け入れたりパチンコで時間を潰したりしているのかは分からないが、あまり会うことはなかった。

とは言え、愛里寿の来る日は不定期でありさらにチームの都合もあるし、エリカも戦車道のプロリーグの日程などまったく興味を失くしており知らないため時間潰しと言っても完全に偶然であるから、やはりたまたま会わないだけというのがエリカの考えだった。

「……まったく、ハンバーグしか作れないのかしら、あの子は」

エリカはハンバーグに掛けられたラップを捲りながら言う。

エリカはそれをレンジでチンすることなく、微妙に冷めたままのハンバーグを口にした。

これがエリカの一日である。愛里寿の来訪という出来事を除けば、ただ仕事をして帰ってきて、あとはパソコンで趣味のネットサーフィンをして時間を潰すだけ。

そこに何の中身も無いし、意義も無い。ただ無為に一日を消化していくだけ。

学生時代のように何かに熱心になって打ち込むということではなくなってしまうた。

だがエリカはそんな生活に何の疑問も持っていなかった。

熱をもつて生きるなど馬鹿らしい。

熱さを求めて太陽に近づいてもただ焼け落ちるだけ。

そこにあるのは墜落の恐怖と徒労と痛みだけ。

何も求めなければ、何も苦しむことはない。

それがエリカの求める安寧のある生活だった。エリカの送っている平穩に満ちた生活だった。

少々お金は心許ないが、今更入れる企業も限られるし、そもそもどこかに入って縛られるというのも嫌だった。エリカはできるだけ身

軽でいたかった。

こんな生活を死ぬまで続けるのだと、エリカは思っていた。だが、そんなエリカの生活を変える出来事が、その日起きた。それは、先の愛里寿の来訪から一ヶ月ほど経ってからだった。

◆◆◆

「ふああ……」

エリカはバイトのシフトの合間に休憩を取りながら、大きくあくびをした。

エリカは前日の真夜中までずっと最近始まったインターネットテレビサイトを利用してアニメを見ていたのだ。そのせいで寝不足気味だった。

そのサイトでは普通のテレビのようにリアルタイムで見ると同時に、つつい埃リカを夜更しがちにしていた。

「あれは危険ね……どんどん嵌っていつちやう……」

「逸見さん、逸見さん」

そこに、店長が馴れ馴れしく話しかけてきた。

「……はい？」

エリカは不機嫌を顔にして対応する。

普通ならこうした態度は社会人としては行ってはいけないのだが、この店舗のだらけた雰囲気ではそれも許されていた。

「おお怖いですよ逸見さん。それはともかく、逸見さんにお問い合わせがあるんですよ」

「お願い？」

エリカはさらに嫌そうな顔をした。

この店長からのお願いななどどうせ碌なことではないに決まっている。だから頼まれる前に断ろうと思った。

「すみませんが——」

「逸見さん確か履歴書に黒森峰の機甲科出身って書いてたましたよね？ つまり戦車道やってたってことですよね？」

しかし店長はエリカが断りを入れる前に店長はまくし立ててきた。

どうやらエリカに断らせない作戦らしい。

だがエリカはどうしても断りたかった。なにせ店長の話す言葉の中に『戦車道』なる単語が混ざっていたのだから。

「あのー、だから——」

「それでさあお願いって言うのはですね。その経験を活かして今度から街の子供達の先生になって欲しいんですよ」

「なっ!?!」

それはあまりにも唐突すぎる願いだった。

——自分が？ 先生に？ 無理だ！ そんなの絶対無理だ！

だがそんなエリカの内心を知らずに店長はまくし立てる。

「いやー私これでも一応店長ですから街の商店街の集まりとかに呼ばれたりするんですけどね、そこで子供達に戦車道をやらせたいやつてみたいっていう子のための教室を開きたいなんて話が上がってますね？ でも先生がいないなープロの方にはいっぱいお金がかかるから頼みたくないなーってなりましてですね？ それで戦車道経験者を探していたんですがこれが意外といなくて……そこで！ 私逸見さんが戦車道経験者だっことを思い出しまして！ それを言うと他の方々もいいねそれ！ ってなりまして！ というわけで頼みましたよ逸見さん！ プロや自衛官程とは行きませんが特別手当は奮発しますので！ 日にちと場所は後日連絡します！ では！」

そう言いたいことだけ言うと、すでに帰り支度をしていた店長はあっという間に帰ってしまった。

「あー、ちよつとー！」

エリカは急いで店長を追いかけるも、休憩室の外に出られては他の客の目があるため追えず、さらにエリカのシフトはまだ時間が残っていた。

「……はあ、なんなのよ……」

エリカは頭を抱えながら、とりあえず今のシフトをこなしてから考えようと思いを放棄することにした。

「はあ……」

エリカは大きくため息を尽きながら帰路についていた。戦車道の教師など、やりたくない。できるわけがない。だが、それを断ろうにも店長は無理やり約束を取り付け、エリカから逃げ道を奪ってしまった。

いつそのこと逃げてしまおうかと思っただが、さすがにそこから逃げるほどエリカは人間が駄目でもなかった。あの店の中では、エリカは比較的真面目な方に入るのだ。

「はあ……」

エリカはその日何度吐いたか分からない青色の吐息を吐きながら、玄関の戸を開けた。

「あっ……」

「ん？ あら……」

そこで、エリカは部屋に来訪者がいるのに気がついた。

エリカと似た髪の色をした女性、島田愛里寿である。

愛里寿はちようど、エリカの部屋の片付けをしているところであった。

「……ただいま」

「お、お帰り……」

愛里寿はどことなくぎこちなさそうに答えた。

久々に会うのである。それも仕方のないことだった。

一方のエリカはそれを気にすることなく、部屋に上がる。今のエリカには、愛里寿以上に気にかかる案件で頭がいっぱいだったからだ。

「……今日は早いなだね」

「そうね……」

エリカの素っ気ない対応に、愛里寿は目に見えてしゅんとする。

だが、すぐさまかぶりを振るって、先程よりも一つトーンの高い声で喋り始めた。

「そういえばさ！ この前のハンバーグどうだった？ 私としてはいろいろ手を加えてみたんだけど——」

「ごめんなさい。今ちよつとそういう気分じゃないの」

だが、その愛里寿の努力も今のエリカの前には無駄であった。

「……ごめん」

「いいのよ別に。……そうね、あなたになら話してもいいかもね」

エリカはなぜだかそう思った。せっかく来てもらっているのに邪険にしすぎるのはいけないと思ったのかもしれない。

もしかしたら何か上手い逃げ方を教えてくれるかもしれないと期待したのかもしれない。

とにかく、愛里寿になら喋ってもいいのではないか、そんな気がしたのだ。

「話すつて……何を？」

愛里寿が疑問に満ちた表情でエリカを見る。エリカは、何気ない世間話をするように切り出した。

「ああ私ね、子供の戦車道の教師をやらされる羽目になったのよ」

「えっ!？」

それに対する愛里寿の反応は非常に大きかった。

手に持っていたゴミ袋から空き缶がこぼれ落ちるほどには。

その大きさに、エリカは少しだけ話したことを後悔した。

「ちよつと、落ち着いて」

「あ、ごめん……」

愛里寿はエリカの言葉で一応の落ち着きを取り戻し、こぼれた空き缶をゴミ袋の中に入れた。

そしてエリカは愛里寿に簡単に説明した。バイト先の店長に戦車道の講師をやれと言われたこと。

断る前に逃げられてしまったこと。

既に決まった約束事になってしまっているようであること。

それを愛里寿はひたすら黙って聞いていた。

そして、すべてを聞いた後、愛里寿は静かに口を開いた。

「……そうだね、それは、エリカのしたいようにすればいいんじゃないかな」

エリカにとってそれは少し意外な返答だった。

確かにどこか逃れる道を用意してくれるかもしれないという期待がなかった訳ではない。

だがそれ以上に、エリカに戦車道を再びやれと強制するのではという予想のほうが強かったのだ。

「ふうん。勧めはしないのね」

「うん。だって、エリカの道はエリカが決めなきやいけないことだから。……私が、これ以上エリカの道を縛るわけにはいかないから」

愛里寿は最後に消え入るように言った。

そのせいか、エリカは愛里寿が最後になんて言ったかを聞き取ることは出来なかった。

「ん？　なんですつて？」

「うん！　なんでもない！　とにかく、エリカが嫌ならそんなのでなくていいんじゃないかな！　そんな無理矢理な約束、反故にしたって文句を言われる筋合いはないもん！」

愛里寿はエリカの手を握って笑顔で言った。

愛里寿の気遣いが嫌でも感じ取られて、エリカはなんだかむず痒い気持ちになった。

そう、まるで太陽を見たときにくしゃみがしたくなる、あの感覚に近いむず痒さを。

「……ありがとう」

エリカは愛里寿から目を逸らしながら言った。

愛里寿はそのエリカの何気ない動作に少し気落ちするも、それをエリカに悟られまいと精一杯の笑顔を作った。そして、元気よく立ち上がり、言った。

「さて！　じゃあ早くゴミを分別してご飯作らないとね！　今日は久々にエリカと一緒に食べるよ！　私のとびっきりのハンバーグ味わってね！」

愛里寿はそう言うのと元気よく残った空き缶や空き瓶をゴミ袋に入れはじめた。

エリカはそんな愛里寿の後ろ姿を見つつも、まあ愛里寿の言う通りやりたいようにやるとしよう、とにかく今はご飯を待とう……と、再び今考えることを放棄した。

## 子供達

「はあ、私も真面目よね……」

エリカはため息を尽きながらジャージ姿で自転車を漕いでいた。結局、エリカは子供達の集まりに出ることにしたのだ。

何故、離れていても二度と触れないと思っていた戦車道の講師などやるつもりになったのかは、自分でも分からない。

しかし、何故だか出てもいいという気持ちになったのだ。

——でも、これは決して戦車道への熱意が戻ったわけではない。そう、頼まれたから教えるだけ。普段のバイトと何も変わらない、お金を貰っての仕事。

エリカはそう自分を納得させることにした。

そうでもしなければ、自分の行動が理解できなかったからだ。

そして、自宅から自転車で三十分程の距離にある、少し広い土地（元は多目的な公園だったらしいが今は使われていない）へとたどり着いた。

そこには、もうそれなりの数の子供達と戦車が並んでいた。

「あら、少し遅れたかしら……」

実際、エリカはまたしてもネット上で夜更しをしていたのだ。

そのため、集合時間よりも少し遅れて現れた。

エリカは土手の側に自転車を止めると、そこから降りて集まっている子供達の前に現れる。

すると、その場に集まっている子供達の視線が集まった。

「えーっと……あなた達が戦車道やりたいって子？」

エリカがそう聞くと、全体的に微妙な空気が漂っていた。

——何これ？ やりたいって集まったんじゃないの？

どうにも話が少し違うようであった。

そもそもエリカが遅れたせいもあるだろうが、そのことはとりあえず棚に上げておくことにした。

「んー……まあいいわ。えっと、私は逸見エリカ。あなた達の先生をやることになりました。よろしくね」

エリカが挨拶すると、バラバラな声で「よろしくお願いします！」  
だったり「よろしく先生——」だったりと返事が帰ってきた。

その統一感のなさから、

——ああ、これは大変そうね……。

とエリカは内心ごちった。

こうして、エリカの講師としての初日が始まった。

エリカはまず戦車の確認からすることにした。

並んでいる戦車は殆どが軽戦車だった。II号戦車J型にT-70、  
LT38、九五式軽戦車などである。中にはルノーFTなどもあつ  
た。

やはり子供……小学生にとっては軽戦車が扱いやすいということ  
なのだろうかと考え、そういえば自分が小さかったころも軽戦車を使  
用していたな、とエリカは思い出した。

そんな軽戦車の中に、唯一中戦車が一台だけあった。V号戦車、パ  
ンターである。

一台だけ中戦車というのもそれはそれで運用に困ってしまう。

エリカはとりあえずその中戦車の運用は後に回すとして、次に並ん  
でいる子供達に視線を向けた。

子供達は子供らしく皆そわそわと落ち着きなく話し合っていた。

その中で、数少ない落ち着きのある子もいた。一番落ち着いていそ  
うな子は、ウエーブの掛かった金髪で大きなメガネが特徴的だった。  
その子のすぐ近くにいる、浅葱色の腰までかかる長い髪をした、片目  
が隠れている少女もまた落ち着いている少女の一人だった。ただこ  
ちらのほうは、落ち着いているというより周りの喧騒に興味がないよ  
うな雰囲気だった。

一方で、もつとも大きな声で喋っている子もエリカには気になつ  
た。青い短髪に鋭い目つきを持った少女である。どうやら戦車を目  
の前にとっても興奮しているようだった。一人称が「俺」でありまるで  
男のような言葉遣いが印象的だった。

「はいはい静かに！ えーつと……じゃあとりあえずみんなにはさつ

そく戦車に乗ってもらおうね。そうねえ……みんな気になる戦車の前に移動してみて」

エリカはパンパンと手を叩きながらそんな指示を出した。

教えると言ってもエリカはこんな小さな子相手に教えたことはないし、そもそも元からあまりやる気がなかったのもあって、かなり適当な指示を出してしまった。

未経験者にいきなり戦車に載せるなど、エリカのいた黒森峰では考えられないことだが、体力づくりからなど始めても小さな子はつまらないだろうというのも考えとして一応あった。

そうすると、みなそれぞれバラけていった。

やはりというか、見た目や歴史的な人気のあるドイツ製の戦車に集中して集まった。

エリカはそれを一応それぞれの戦車に均等に分け直した。方法はエリカが適当に選んだ、それだけである。

一部乗員が足りない戦車が出てきたが、そこは砲手と装填手を兼任してもらうなどして解決させた。

「よしじゃあ決まったわね。あとはじゃあ好きに動かしていいわよ。私はここで見てるから」

エリカはまたしてもなげやりな指示を出した。

「あの……」

すると、集団の中から一人の少女が一步前え出てきた。あの大人しかった金髪の子だった。

「私達、戦車の動かし方なんて知らないです」

「あーそれもそうよね……んじゃ、みんな集まって。いまざつと教えるから」

エリカは自分のやる気のなさからくる失念を反省しながらも、簡単にそれぞれの動きを教えた。

大人数を前にした場合一つの戦車に入って実際に見てもらおうというわけにはいかないため、ジェスチャーによる動作だったが。

それで一応理解したのか、子供達はそれぞれの戦車に搭乗し思い思いに戦車を動かし始めた。

エリカはそれを近くにあったベンチに座りながらゆつくりと眺めていた。

思えば、戦車が動く姿を見るなんてもう何年もなかったことだった。

それだけ、エリカは戦車道から離れていた。

今も真面目に戦車道に取り組もうと思っただけではない。こうして指示だけ出して眺めているのがその証拠である。

ではなぜここに来たのか？

やはりその答えは出てこなかった。とりあえず、自分は真面目だからということに納得することにした。

各々の戦車がそれぞれ自由に動いている。時にはそれぞれの役割を交代したり、また乗員も自主的に交換しあったりなどして、初めての戦車を楽しんでいるようだった。

その子供達の顔は、とても楽しそうな顔だった。最初のやる気なさそうな雰囲気とは、まるで真逆である。

「……………」

エリカはその顔を何故か見続けることができなかった。

胸の内によく分からない何かが沸き上がってきて、それがなんだかとてもくすぐったかったのだ。

そうして時折顔を背けつつも戦車の動きを観察していくうちに、あつという間に所定の時間になった。

エリカは無線機に集まるように連絡を入れる。

それぞれの戦車の無線機からは時間を惜しむ声が聞こえてくるも、エリカはそれを無視し戦車を集結させた。エリカとしては、早く帰りたいかったのだ。

そして集まってきた戦車から子供達が降りてくる。エリカはそれを整理させた。

「はい。じゃあ今日はここまでね。次は明後日の同じ時間だから。何をやるかは……そのとき連絡します。はい、解散」

エリカがそう言うと、子供達は一瞬驚いた表情をするも、すぐさまバラけていった。だが、その顔はやはり皆どこか満足感に満ちてい

た。

落ち着いていた金髪の子も歳相応らしくキャツキヤと友達と話していたし、あの声の大きい子は再び大きな声で興奮しながら叫んでいる。まるで興味がなかったようにしていた浅葱色の髪の子も、顔が火照り口には出さないも興奮しているのが見て分かった。

そして全員が帰路につこうとして、エリカもまた帰ろうと自転車に跨ったときだった。

「先生ー」

エリカは最初それが自分のことだと分からなかった。

だが、少しした後には自分自身のことを呼ばれたのだと分かり、声のした方向に首を曲げる。

そこには、帰ったかと思われた金髪の少女が立っていた。

「えっと……先生！ 今日ありがとうございます！ 明後日からもよろしくお願いしますー！」

そう言ってその少女は頭を下げると、そのままその子も自転車に乗って帰っていった。

「……礼儀正しい子、ね」

エリカはその後ろ姿を見ながら、鞆から事前に貰ったリストを取り出した。

そこには集まった子の名前と写真が載せられていた。エリカはそれを貰った後一度だけ目を通したが、その内容をすっかり忘れていたのだ。

エリカはそのリストの中から先ほどの少女を探す。それはリストのほぼ頭の部分に出てきた。

「ふうん……渥美梨華子、って言うんだ……」

エリカは名前を確認すると、リストを再び鞆にしまい、自転車を漕ぎ始めた。

それから、エリカは定期的にその戦車道教室の講師を行った。

だいたい週に三回のペースである。エリカはその戦車道教室で、毎回あまりやる気はなくとも一応訓練のようなものをさせていた。

適当な廃材などを目標にした射撃訓練や、隊列を乱さずに走行する訓練などである。

とは言え、エリカは最初に指示を出すだけで、あとは子供達が勝手にやるのを眺めているだけだった。

誰がどの戦車に乗るといいうのも子供達任せだった。そのせいか、前回とその次の回で搭乗員がまったく違う、なんてこともあった。

当然、エリカは先生として意見を求められることも多かった。

エリカ自身にやる気はなくとも、質問には一応ちゃんと答えた。本来なら無下に扱ってもいいとすら思っているのに、何故かエリカには断れなかった。

何故かと言えば、エリカはどうにも何人かの生徒が気になって仕方がなかった。気になるというのは、もちろん戦車道における才能的な部分である。

何人か光る生徒がいたが、その中でもエリカ特に三人の生徒が忘れられなかった。

一人はエリカに初日に挨拶をしてきた子、渥美梨華子。

この子はよく全体を見ていて隊長向きだな、とエリカは思った。

「先生！ 教えて欲しいところがあるんですが！」

梨華子は一番エリカに質問をしに来る子だった。

もう一人は、青髪で鋭い目の、声の大きなあの子。名は百華鈴ひやつかすずと言った。鈴はとても気性の荒い性格だったが、戦車同士の近接戦に関してはピカイチだった。

「逸見先生よお。俺は試合がしたいぜ。もつと戦車同士で殴りあってみてえんだ！」

鈴はとても好戦的なことを言う子だった。

最後の一人は、あのだどこかつまらなそうにしていた、浅葱色の長髪の子。式瓶理沙にへいりさである。

とても冷静で落ち着いたものの見方が出来る子だった。それは大きな強みになるだろうと、エリカは思った。

「エリカ先生。わたくし、こういったことは不慣れで……でもとても楽しいんですの」

理沙は笑顔でエリカにそう言った。どうにも、少し複雑な家の事情があるらしかった。

エリカは、なぜ自分がこんなに子供達のことを気にかかるか分からなかった。

元は無理やり押し付けられた役職なのに。

元はお金のために始めたようなものなのに。

元は戦車道には関わりたくないと思っていたのに。

日が龍につれ、エリカの中での矛盾は大きくなっていった。戦車道はもう嫌だというのに、先生として子供に戦車道を教えている自分。そんな矛盾がどうしても解決できず、エリカはひっそりと苦しんだ。

そのせめてもの反抗に、エリカは先生としての態度を不真面目にすることでなんとか己を保っていた。

そう、やる気なんてない。熱なんて入っていない。

そんなものがあっても、後悔するだけだって知っているから。

「先生！」

「逸見先生！」

「エリカ先生」

——ああやめてくれ。私をそんな目で見ないでくれ。私を先生なんて呼ばないでくれ。私はもう捨てたんだ。何もかも捨てて諦める人生を選んだはずなんだ。なのにどうして、どうして。

分からなかった。エリカにはもう、何がどうしてこうなっているのか分からなかった。

そうしてエリカが己の中の二律背反に苦しんでいる中だった。

「逸見さん！ 実は今度子供達に戦車道の試合をやらせようって話になつてさあ——」

店長が、そんな話をエリカに持ってきた。

## エリカの決意

「えっ!? 試合ー やったー!」

エリカがその日の訓練の終わりに伝えたその言葉を聞いて、生徒達はみな盛り上がりを見せた。

「どうする鈴ちゃん! 試合だつてきー! 緊張するー!」

梨華子の黄色い声が聞こえてくる。

「おう! 楽しみに待ってた試合がとうとうやって来たか! ふふ、俺の力を見せるときがついやって来たってわけだな!」

鈴の威勢に満ちた声も。

「試合……わたくしにそのようなことができるのかしら。でも、興味はあるわね……」

理沙の動揺と期待が入り混じった声も。

とにかく、いろんな反応があったが、皆試合に向けて期待を持っていることは確かだった。

エリカはそんな姿を見て、一抹の不安にかられていた。

——期待なんて持たないほうがいい。そんなものを持って、どうせ裏切られるだけなんだから。

本当は声にしてそのことを言いたかった。

だが、喜んでいる彼女達を前に、とてもではないが言うことはできなかった。

興奮冷めやらぬ中で、その日はそれでお開きとなった。

そして次の訓練から、子供達はどこか浮かれた様子で訓練に望んでいた。

そこにはやはり、どこか楽観的な見方があった。

エリカに対する質問も少し量が減った。

「いやー試合楽しみだねー! 私達きつとすっごい強いよー!」

「勝っちゃったらどうしょー!」

そんな言葉が聞こえてくるあたり、試合が出来るほど成長した自分達にもう質問することはないという考えがあるようにエリカには思えた。

ただ、エリカが気にかけていた三人だけはいつも通りに質問に来た。

それが、エリカにはなんだか安心できる事のように思えて、またエリカは自分の中の矛盾に苦しんだ。

そうしているうちに、試合前の最後の訓練となった。

その練習の終わりに、鈴がこんなことを言い出した。

「逸見先生大変だ！ 俺達のチーム名がねえ！」

「ああ、そう言えば……」

戦車道教室として集まっていたそのままだったため、チームの名前などは考えていなかった。

「そう言えばじゃねーよ！ やっぱチーム名ねえと締まらねえって！」

な！ 今すぐ決めようぜ！ 皆もそう思うよなー！」

「思いまーす！」

「やっぱ名前欲しいー！」

「かわいいのがいいなー！」

その声に他の生徒達も同意した。

そのためチーム名を今から考えることになったのだが、やはりここは小学生の集まりでどうにもまとまりがなく、エリカもそこに口出しする気はなかった。そしてかなりの時間を掛けた結果、クジで名前を決めることとなった。クジをそれぞれ二つにわけ、引いた紙で名前を組み合わせるといふ方法だ。

エリカは子供達の考えのために持ってきていたノート——と言っても書き込んだことはない——を破りクジをつくると、それぞれがそれぞれに好きな文字を書き、それを戦車の上に二つの山を作って散らばらせてかき混ぜた。そして、それぞれの山から一枚ずつクジを取る。

結果、以下のような名前になった。

『公園クロコダイルズ』

「……………」

「……………」

「…………おい、誰だよ公園なんてワード入れたの」

鎮まり帰った空気の中で鈴が声を上げた。その声に反応して手を上げたのは梨華子だった。

「梨華子、お前なんでこんなワードを……」

「えーだってここって元は公園じゃない？ だったら所属を表すワードとしては一番かなーって」

「相変わらずお前のネーミングセンスはおかしいな……」

「あら鈴さん、でもこのクロコダイルズもおかしくはなくて？ なんだかわいくないわ」

「なんだと理沙でめえ！ いいだろクロコダイルカッターだろ！ 顎の力すげーつえーんだぞ！ なんでも噛み砕くんだぞ！」

理沙の言葉に鈴は過剰に反応した。どうやらクロコダイルズという名前を書いたのは鈴らしい。

とにかく、こうしてチームの名前は決まった。

『公園クロコダイルズ』の初試合は次の日に迫っていた。



「うっぐ……ひっぐ……」

子供達の泣き声が、曖昧な色合いを見せる空の元で聞こえてきた。

エリカはそれを、ただ黙って見つめていた。

——ああ、こうなることは分かっていたのに。

エリカは心の中でどこか達観したかのように呟いた。

『公園クロコダイルズ』は負けた。相手チームに、完膚なきほどに叩きのめされたのだ。

相手チーム『隠里ボコーズ』は子供向けの大会にいくつも出ている名門チームだった。それがたまたま熊本のようにやって来たため試合を組んでもらったそうだが、結果はこれである。

エリカの教え子達は完全に敗北し、その泥の味を味わっていた。

相手は名門チームである。当然のことだった。

だが、その衝撃は子供達にはとても辛いものだった。

慢心していたのもあった。試合の経験がなかったのもあった。エ

リカが何も教えてこなかったのもあった。

しかし、負けは負けとして、彼女達の心に刻み込まれた。

「うう……こんなのやだあ……全然楽しくない……」

「もう私戦車道やめよっかなー……」

一部の泣いていない子達が、そんなことを口にし始めた。

エリカは、それでいいと思った。

——そう、変に努力しても痛い目を見るんだから、始めから努力しないほうが楽に決まっている。それができるだけ、あの子達は賢いんだ。

それがエリカの出していた結論だった。そう、ずっと前に自分で認めた事だった。

だが——

「……？」

エリカの胸に、何かがチクリと刺す感触があった。

それが何かはやはり分からない。例の矛盾の苦しみとも少し違った、だが同質のように思える痛みだった。

——バカバカしい……！

エリカはそれを必死に否定した。

——私は結論を出した。それでいいじゃないか……！

自分自身にそう言い聞かせる。

そうしてエリカは、必死に自分の中の痛みをごまかしながら、生徒達を引率し試合会場から去っていった。

——次の訓練はきつと、誰もこないだろうな……。

そんなことを思いながら。



次の訓練の日、エリカの目覚めは遅かった。

「……どうせ、誰も来てないでしょうね……」

そんなことをつぶやきながらも、エリカは出かける準備をしていた。

誰も来ないなら自分が行っても意味はない。そもそも、今から行っても遅刻である。なのに、何故かエリカは行く準備を整え、部屋から出ていた。

「どうして私、自転車なんか漕いでるのかしら……」

エリカは自転車を漕ぎながらそんなことを呟く。

帰ってしまえばいいのに。

今ならまだ間に合う。

ほら、はやく帰らないと。

そんな心の声がエリカを帰そうとエリカの足を鈍らせる。だが、それでもエリカは自転車を漕いだ。

どうしてもいかなければならない。

そんな理由の分からない焦燥が、彼女を駆り立てたのだ。

そうしてエリカはいつもの場所に辿り着く。そこでエリカが目にしたものは、驚きの光景だった。

いたのだ。

確かに数は減っていた。当初の半分以下の数だった。だが、確かにいたのだ。エリカを待つ、生徒達の姿がそこにはあったのだ。

エリカは驚きながらも自転車を止め、彼女達の所へ降りていく。

すると、集まっていた子の中から、一人の子が声を上げた。梨華子だった。

「もう先生！ 遅刻ですよ！」

「あなた達、どうして……」

エリカは思ったことが口に出ていた。

それに答えたのは、鈴だった。

「どうしてって、なあ……あんなにやられちゃ、絶対リベンジしてやる！ って思うのが普通だろ？」

まるで当然の事を言うように笑顔で言う鈴。

さらに、そこに理沙が付け加えるように言った。

「確かに、もうつまらなくなつて止めた子達もいっぱいいます……。ですが、わたくしは本当に戦車が好きになつたんですの。初めて、自分の意志で何かが好きになつたんですの。だから、それを捨てるだな

んてありえませんわ」

理沙もまた、笑顔で語る。

「そうだよ先生——！」

「もつと私達に戦車のこと教えて！ 今度やったときは絶対勝つからさ——！」

「くー今思い出しても腹立ってきたー！ 勝つと思ってた自分が憎い！」

他の子達も、思い思いにそんなことを口にする。

その誰もが、明るい笑顔を湛えていた。

そこで、エリカはついに気がついたのだ。

——ああ、今まで私がこの子達に向けていた感情が分かった。それは、憧れだ。あの輝くものへの、太陽への憧れだ。彼女達は、太陽だったんだ。私は未だに、太陽に憧れていたんだ。

「ちよ、先生どうしたんですか!？」

「え!？」

エリカは梨華子の慌てた様子で自分の状況に気がついた。エリカは、泣いていたのだ。

いつの間にか、ボロボロと涙がこぼれ始めていたのだ。

「ううん！ ちよつと目にゴミが入ったみたいね！ ごめんなさい」

エリカは必死に目元を拭う。

そうしながら、エリカは一つの決意を胸にした。



次の訓練の前日、エリカは休みを取った。そして、自宅で色々な作業を始めた。

まずは部屋の掃除である。

今まで愛里寿に任せきりだった掃除を、久しぶりに自分から進んで始めたのだ。

缶と瓶の分別や掃除機がけ、細かいところの埃取りなど思いつく限りの掃除を行った。

そうして部屋を綺麗にした後に、今度は今まで何も書いていなかったノートに記述を始めた。内容は、今残っている生徒達の戦車道におけるデータを事細かに記すこと、そして、それとは別に、戦車道における基本的なポイントをまとめたノートも作った。

その作業は夜遅くまでかかり、完成する頃には時計は十二時を回っていた。

最後にエリカは、タンスの奥から一式の制服を取り出した。

それは、黒森峰時代に使っていたパンツァージャケットである。

「まさか、これに再び袖を通す日が来るなんてね……」

ずつと捨てようと思っていたものだった。

だが、結局後回しにし続けずつとタンスの肥やしとなっていたものだった。

今、エリカはそれに再び袖を通す決意をした。

あの太陽に恋焦がれていた激情を取り戻すために。

「……よしー」

エリカはとにかく久々に着てみよう、今着ている服を脱ぎ、そしてそのパンツァージャケットを――

「……キツイわ……」

纏えなかった。

翌日の朝、梨華子達生徒が訓練場に行くと、そこにはエリカの姿があった。

「あれっ？　先生今日は早いんですねいつもギリギリに来るのに」

「それにいつものジャージじゃねえな」

「ええつと……パンツァージャケットと言うんですたっけ？」

エリカの服装は黒森峰時代のパンツァージャケットの前を明けた状態で着、紺色のスカートを履いている。

結局あの後もエリカはパンツァージャケットをちゃんと着ることはできず、こうして前を開けてごまかし、スカートは当時のものと似た色のものを履いているのだ。

「ええ、あなた達がやる気になったのなら、私もそれ相応の努力を見せ

ないと、思ってたね」

エリカのその表情と言葉には、以前のようなやる気のなさは感じられなかった。

今まで見たことのないエリカの姿に、梨華子達は珍しいものを見るような目でエリカを見る。

「……なによ、そんな珍しい？」

さすがにエリカもそれは気になったようで、少し顔を赤くしながら言う。

すると、

「いいえ、先生が今まで以上に教えてくれるなら、私達は歓迎ですよ！」

「そうだな！ つかあいつらにリベンジしなくちゃならねえんだ。そうこえねと！」

「それに、凛々しい服装を着ている先生はとても素敵ですわ」

と、暖かな反応が帰ってきた。

エリカはその言葉に思わず微笑みを浮かべる。

そうしているうちに、次々と生徒達が集まってくる。そして、生徒全員が集まったところで、エリカは大きな声で話し始めた。

「みんな！ 前回の試合はとても悔しいものだったと思うわ！ そしてみんなの勝ちたいという気持ちは私にもよく伝わった！ だから、私もこれからは厳しく指導していくから、そのつもりでついてきなさい！ いいわね！」

今まで誰もが聞いたことのないようなエリカの張りのある声。

それに気圧されつつも、生徒達は、

『はいー』

と元気良く答えた。

「よし！ それじゃあまず、それぞれの戦車の正式な搭乗員そして隊長を発表します。いままではその場のノリで決めていたことだけど、ちゃんと戦うと言うのならここをまず決めないと話にならないわ。それではまず隊長とその車両から発表します……渥美梨華子！」

「は、はいー」

梨華子はまさか自分の名前が出てくるものとは思ってはいなかったらしく驚きに満ちた表情と声を見せる。

「梨華子、あなたが隊長よ」

「私が……ですか？」

「ええ、あなたは車長として全体の指揮能力に優れている。局所戦は少々苦手な部分はあるけど、それを補って余りあるわ。だから梨華子、あなたが全体の指揮を取りなさい。そして、戦車はV号戦車を与えるわ。うちのチーム唯一の中戦車よ。フラッグ車として効果的に運用しなさい」

梨華子がぎゅつと拳を握りしめる。

エリカの言葉に、梨華子は重い責任を感じているようだった。

だが、その瞳に気後れはない。

「……分かりました！ 渥美梨華子！ 隊長職を喜んで受けさせていただきます！」

梨華子の力強い声が帰ってくる。

エリカは、その梨華子の姿に笑みを返した。

「よく言ったわ梨華子。次に副隊長の発表をします。……百華鈴！」

「式瓶理沙！」

「へっ!？」

「わたくし達……ですか？」

梨華子の隊長就任を嬉しそうな顔で見っていた二人は、度肝を抜かれたように梨華子のときと同じく驚きを見せた。

「ええ、あなた達二人が副隊長よ。鈴は梨華子にはない局所的な戦闘の才があつてかつ意外と全体を見ることが出来る。理沙は状況や情報を冷静に分析して最適解を出すことができる。二人とも、隊長を支える車長には必要な能力よ」

エリカの説明に、鈴と理沙は顔を少し見合わせるも、互いにコクリと頷きエリカに輝いた瞳を返してくる。

「ここまで言われちゃあやるつきやねえよなあ。この百華鈴！ 副隊長やらせてもらうぜ！」

「わたくしなど力になれるとは思っていませんでしたが、エリカ先生

が言うなら……式瓶理沙、謹んで副隊長の任を受けさせて頂きます」  
「よく言ったわ二人共。理沙にはⅡ号戦車を、理沙にはT—90を与えるわ。考えて運用しなさい。さて、では次は——」

こうしてエリカは次々どどの戦車に誰を載せるか、役割はどこかを生徒達に与えていった。

そして、全員に役割を分配すると、エリカは再び声を上げた。

「さて、それじゃあ今日の訓練を始めるわ。まずはこの訓練場をぐるつと十五周！」

そのエリカの命令に、生徒達の驚きの声上がる。

だがエリカはそのどよめきに対し手を打ち鳴らし鎮め、言った。

「静かに！ いい、あなた達にはまず基礎的な体力が足りてないのよ。だから、まずはそこからつけることから始めます！ ほら、走った走った！」

エリカに焚き付けられ生徒達は慌てながら走り始める。

その日の特訓は結局、戦車に乗ったのは最後の最後で、その大部分は基礎体力作りに終わった。

「みんな今日はお疲れ様。でもこれで満足しては駄目よ。訓練のない日も家でトレーニングをして体を作っておくこと。しばらくは体力作りがメインになるけど我慢してちょうだいね。勝つためにはまず地道なことから始めないといけないの。いいわね？」

『は、はいー』

生徒達は疲弊しながらも声を合わせて返事をした。

そうしてその日の訓練を終了し、皆へトへトになりながら家路につく。

その中で、エリカは少しだけ不安な気持ちになっていた。

——急に厳しくして、次からさらに人数が減ったらどうしようかしら。

だが、エリカはそんな弱気な考えを、頭を振って打ち払う。

——ううん、厳しくすると言ったもの。これぐらいについてこれないと困るわ。

そうしてエリカはこれから先の訓練計画を考えることに頭を切り

替えた。

結果として、生徒達は訓練にしっかりとついてきた。

次の練習もその次の次の訓練も、誰一人欠ける事なく訓練についてきた。

弱音を吐く生徒も出てきたが、そのときは生徒同士で互いに励まし合い、支えあっていた。

エリカは徐々に訓練を体力作りから実践的な訓練へとシフトさせていった。

少しずつ、ゆつくりとだが生徒達に経験を積ませていった。

練習試合も組めるようバイト先の店長に掛け合った。

最初はエリカが積極的な姿勢を見せたことに驚いていたが、戦車道教室が上手く回っていることを知ると、喜んで用意してくれた。どうにも戦車道教室がうまくいくと商店街での集まりでもいい待遇になるらしい。

そうしてエリカ達は練習試合を組むようになっていった。

最初は苦戦が多かったが、徐々に見事な勝ち星を拾えるようになっていった。

生徒達は一つ勝ちを拾うごとに喜んだ。

「やったよ！ 今回も勝てた！」

「ふっフラッグ車を落とした俺のおかげだな」

「あら一人敵の策にハマってピンチを招いたのは誰でしたっけ？」

「かつ、勝ったからいいだろうが！」

「ハハハ……まあ鈴ちゃんの行為は味方車を守ろうとした結果だし、ね」

「……梨華子さんがそう言うのなら」

彼女らは本当に楽しそうだった。一つ一つの試合に全力を掛け、得難いものを手に入れていった。

そしてエリカもまた彼女達が勝つと嬉しかった。

彼女達の勝利が、彼女達の一喜一憂が、まるで自分のことのように感じられた。彼女達が強くなっていくことに無上の喜びを憶え、エリ

カの指導への熱もどんどんと上がっていった。

エリカ達が強くなつていくことで変わったこともあった。

出て行った生徒達の中に戻ってくるものも現れたのだ。

「おいおい今更どういうつもりで戻ってきたんだええ!？」

「まあまあ鈴ちゃん……」

「……確かに、勝つようになってから戻ってくるというのは虫が良すぎますわね」

「もう理沙ちゃんまでー!」

といった風に、最初は出て行ったことを咎めるものもいて上手く行かなかった。

エリカは子供達自身の問題としてあまり介入しなかったのだが、子供達同士で大きく揉めに揉めた後、エリカは少しだけ彼女達の背中を押した。

具体的には、後から入ってきた組が訓練終了後もこつそりと練習している風景を認めていない子に見せてあげたのだ。

「あいつら……」

「まああなた達がどう思おうとそれはあなた達の勝手よ。でも、この姿は一応見たほうがいいと思つてね」

「……まあ、あそこまで頑張っているのなら、認めてあげてもいいかもしませんわね」

「あとはあなた達次第よ、頑張りなさい」

そのエリカの後押しのおかげあってか、子供達はすぐに和解し、チームは再び一つになった。

さらに合流組だけではなく新規に戦車道教室に入りたいという子も出てきた。中には最初にやめてしまいう子も多かったが、しっかりとついてくる子は大きな戦力となった。

人数が増えたことにより現状ある戦車をすべてに搭乗員が付けられる程度にはなった。

エリカの戦車道教室は、着実に一步一步前に進んでいった。

そしてついに、エリカ達に大きな転機が訪れた。

## 太陽とハンバーグ

「それでは訓練を開始……する前に、皆に話があるわ」

その日の訓練の始めに、エリカは全員が集まっている中で普段の挨拶とは別に話を始めた。

生徒達は皆何事かとエリカの言葉に耳を傾ける。

「えー実は近々、本州で小学生を対象にした戦車道の大会が開かれることになったわ」

エリカはひとつのチラシを全員に見られるように大きく掲げた。そこには『全国ちびっ子戦車道大会』という言葉が書かれている。

「大会!？」

大会という言葉に子供達はざわつく。

エリカはそのざわつきは当然だと思いつつも、手をうって集中を促した。

「はいはい静かに！ それで、私はこの大会にこのチーム、『公園クロコダイルズ』で出たいと思うの。相手にはきつとあの『隠里ゴコーズ』もいるでしょう。雪辱を晴らすにはいい機会だし、初めての大会だから緊張するでしょうけど、ぜひ頑張って欲しいわ。大丈夫かしら、あなた達？」

エリカは一応生徒達に確認を取った。

あくまで参加するしないは生徒達の自主性に任せたいと思ったのだ。

だが、エリカは心配していなかった。

なぜなら、

「もちろんですよ先生！ むしろぜひ参加させてください！」

「へへっ、どうやら俺の武勇伝が全国に広まるときがやってくるようだな……！」

「鈴の武勇伝はともかく、大会というのは魅力的ですわね。わたくしも楽しみです」

生徒達はこうも大会に対して前向きになってくれるのだから。

こうしてエリカ達は大会に出ることになった。ちなみに、この大会

は持って来られた話ではなくエリカが自主的に調べあげた結果見つけ出した大会である。

バイト先の店長達にも戦車道教室の箔がつくからと許可を貰った。エリカは、どうしても生徒達に晴れ舞台というのを経験させて上げたかったのだ。

エリカ達戦車道教室は大会に向けより一層激しい訓練に身を置いた。その内容は、下手な教室というレベルを超えていた部分すらあった。

だが、誰もリタイアすることはなかった。むしろ、誰しもが厳しい特訓を望んだ。

エリカもエリカで、訓練を厳しくする一方であまりきつくなり過ぎないようにというバランス調整に苦心していた。

あまり辛すぎる特訓は過去の自分の過ちを繰り返してしまう事になりかねないからだ。

そのおかげか、確かに戦車道教室の訓練は厳しく通常の教室のレベルを超えていたが、だが決してオーバーワーク気味なものとはならなかった。

そうして一つの「目標」をもって訓練に挑むエリカの戦車道教室。激しい努力のなかで、とうとうその日がやって来た。

「ここが会場……凄い……」

梨華子は目の前に広がる光景に、圧倒された声を出した。

場所は『全国ちびっ子戦車道大会』が行われる会場であるとある広地。元はプロリーグの試合などにも使われる場所である。

運営本部には戦車道連盟も関わっており、その土地を使用することができたのだ。

控えとして用意された場所には各地から集まった子供達や戦車が集まっており、普段ならとても見ることでできない光景が広がっている。

「すっっい……」

「おいおいなんだあ梨華子？　びびってんのかあ？」

「……そういう鈴こそ、震えてはなくて？」

圧倒される梨華子を茶化す鈴に対し、理沙が言う。

「う、うるせえ！ お前だつて！」

鈴が理沙の手を取る。理沙の手は、汗でびっしょりになっていた。

「こ、これはその……そう！ 本州は暑いですわね……」

「九州人が言えることじゃねえぞそれ！」

「は、ははは……みんな緊張してるんだね……」

——まずいわね……。

エリカは梨華子達を見ながら、そう思った。

梨華子達以外の他の生徒も、多かれ少なかれ緊張しているようだった。

練習試合はともかく、大きな試合は初めてである。それも当然であつた。

だが、本番前にこれでは緊張して本来の実力が出せない場合がある。それでは、きつと悔いが残ってしまう。どうすればいいのかとエリカは考えた。

そして、一つの行動に出ることを決めた。

「フレッツ！ フレッツ！」

「え!?!」

エリカは突如、大声で生徒達を応援し始めたのだ。もちろん、大きな体の動き付きである。

「フレッツ！ フレッツ！ 公園クロコダイルズ！」

「ちよ、逸見先生!?!」

その場にいた誰もがエリカに視線を向け、生徒達は皆動揺する。しかし、エリカは応援をやめない。

「フレッツフレッツクロコダイルズ！ フレッツフレッツクロコダイルズ！」

「エイエイオー！」

「エ、エリカ先生何やっていますの!?! は、恥ずかしいです……!」  
理沙が慌てて止める。

すると、エリカは真っ赤な満面の笑みを浮かべながら、生徒達に言った。

「ええ！ すっごい恥ずかしいわ！ これ以上恥ずかしいことはないでしょうね。だから、あなた達の緊張なんてもう小さいことでしょうか？」

「えっ？ あっ……」

そこで梨華子達は、今までの緊張が嘘のようにどこかに行ったのを確認した。

エリカの捨て身の行為が、生徒達から緊張を吹き飛ばしたのだ。

「ぷっ……あっはははははははは！」

『はははははははははは！』

梨華子を端に、生徒達に、そしてエリカに笑いが伝播する。もはやそこに緊張はない。

「もう先生つてば無茶するんだからー」

「まったくだぜ、あんな逸見先生初めてみたぜ……ふふふ」

「ええ本当に。これは永久保存しておくべきでしたわね、くすくす」

——良かった。

エリカは心からそう思った。

——これできつと心置きなく戦える。あとは、この子達が頑張るだけ。

「さ、もうそろそろ時間よ。一回戦敗退なんてさっきの私並に恥ずかしい結果、出してくるんじゃないわよ！」

『はー！』

生徒達の整った声が和音を奏でる。

こうしてエリカ達は万全の状態で大会の第一線へと足を踏み出すことができた。

そこからのエリカ達『公園クロコダイルズ』の活躍はまさに破竹の勢いだっただ。

一回戦の相手を全滅させると、二回戦の相手もペろりと平らげた。準決勝も危なげなく勝利をもぎ取り、なんとあつという間に決勝戦へと歩を進めた。

そして決勝戦の相手は、あの『隠里ボコース』だった。

「どうとう来たわね……」

エリカがぼつりと零す。

それまで見事な勝利を積み上げてきた『公園クロコダイルズ』だったが、そこに油断はない。相手はかつて完膚無きまでに叩きのめされた相手なのだから。

「私、この日を待っていました……!」

梨花子が珍しく闘争心に溢れた様子で言う。

「俺もだ、血が滾るぜ……!」

鈴はいつも以上にやる気を満ち溢れさせていた。

「わたくしも、今回ばかりは感情的にならざるを得ませんわね」  
理沙もまた、不敵な笑みを浮かべている。

始まる前とは別種の、いい意味での緊張がチームを包んでいた。  
エリカはその教え子達の姿を見て、何も恐れは抱いていなかった。

——この子達ならきつと勝てる。だって、私の最高の教え子達なん  
ですもの。

「さあみんな、いよいよ決勝戦よ。勝っても負けても、これが最後。リ  
ベンジの唯一の機会よ。悔いのないよう、全力でやってきなさい!」  
『了解!』

生徒達は全員エリカに敬礼した。まるで、戦地に旅立つ兵士が上官  
にそうするように。いや、まさにそうなのだ。『公園クロコダイルズ』  
にとってこれから先は戦地で、エリカは信頼に値する上官なのだ。

それぞれの生徒達が戦車に乗り込み、定位置につく。  
最後の試合が、ついに始まった。

試合は最初苦戦を強いられた。

神出鬼没の『隠里ボコース』の戦術に見事に翻弄されてしまったの  
だ。

また、戦車の質も数も、向こうのほうがはるかに良かった。

戦いは、始まる前から劣勢を強いられていたのだ。

だが、『公園クロコダイルズ』も負けていなかった。

相手の行動を、徐々に読み始め返り討ちに始めたのだ。

エリカはそれを、理沙の分析の結果だと分かっていた。理沙は情報を分析することに非常に長けている。この状況において、相手は理沙にデータを与えすぎたのだ。

やがて劣勢だった状況がだんだんと縮まっていく。

だが、それでも決定的な反抗につながらない。

このままではジリ貧で追い詰められてしまう。

と、そこで『公園クロコダイルズ』は大きな動きに出た。II号戦車

——鈴を中心とした小規模の部隊が、敵に特攻を仕掛けたのだ。

それは一見すれば破れかぶれの特攻にしか見えないだろう。

だがエリカには分かっていた。それは鈴による計算された特攻なのだ。鈴はただの喧嘩屋ではない。常に全体を把握し動くことができる。梨華子がいなければ隊長の器であるほどの車長なのだ。

その鈴の特攻が、無意味であるはずはなかった。

敵の車両が鈴の戦車を狙う。だが、鈴を狙おうと足を止めた戦車が、次々と撃破されていく。理沙を中心とした部隊が遠距離から砲撃を行ったのだ。

その隙をついて鈴は敵の腸へと食らい付く。敵陣深く入った鈴の部隊は、思うように敵陣をかき乱した。特に鈴の車両の一騎当千ぶりは見事であった。格闘戦において、彼女の右に出るものはいないだろうと、エリカは知っていた。

だが敵も馬鹿ではない。理沙達砲撃部隊を処理し、冷静に鈴から距離を取っていく。一台、また一台とやられていく鈴の部隊。

最後の鈴の車両も、距離を取られ得意のインファイトにもつれ込ませることができない。また敵のフラッグは中戦車KV-1であったため距離を取られると軽戦車では分が悪かった。

敵のフラッグ車が、鈴の車両を狙った。

もはやこれまでか。

誰もがそう思った。

■  
そう、戦場にいる彼女らと、エリカ以外は。

フラッグ車が鈴の車両を撃破しようとしたその瞬間、敵のフラッグ車は白旗を上げた。

こちらのフラッグ車、V号戦車パンターが、その有効射程に敵のフラッグ車をいつの間にか捉えていたのだ。

そう、すべては作戦だった。

敵の攪乱は、すべてフラッグ車をこちらの有効範囲へとおびき寄せ  
るため。行動すべてが布石だったのだ。

すべては、隊長である梨華子の優れた作戦立案能力と指揮能力によるものだった。

こうして梨華子達『公園クロコダイルズ』は勝利を収めた。

あのときの雪辱を晴らしただけでなく、大会での優勝という大きな  
栄冠を勝ち取ったのだ。

「……よく頑張ったわね、みんな……！」

エリカは一人、関係者席で立ち上がって拳を握りしめてその瞬間を  
喜んだ。

彼女達は勝ち取ったのだ。エリカには勝ち取れなかった、優勝とい  
う輝きを。

エリカは、そのことを思うだけで今にも泣きそうだった。

「おめでとう、エリカ」

そんなエリカに後ろから言葉をかける者がいた。

エリカは聞き覚えのある声に、後ろを振り向く。

「愛里寿……」

そこにいたのは、他の誰でもない、愛里寿だった。

「驚かないんだね」

「ええ、だってあの忍者戦術、それに『隠里ボコーズ』なんて名前、こ  
れであなたが関わってない訳がないって、うっすら分かってたもの」  
「そっか」

エリカと愛里寿は見つめ合う。エリカも愛里寿も、とても穏やかな  
笑顔をしていた。

「……エリカは、見つけたんだね。新しい太陽を」

愛里寿が先に切り出す。その言葉に、エリカはコクリと頷いた。

「……ええ。あの子達は、私にとっての新しい太陽よ。私の中で暖かく輝いてくれる、新しい太陽」

「……そっか」

愛里寿は笑顔で、でもどこか寂しげに言うのと、愛里寿はエリカに背を向けた。

「よかったねエリカ。……もう、本当に私はいらないね。おめでとう、エリカ」

愛里寿はそう言い残してエリカから去っていかうとする。

「……でも！」

しかし、エリカはそんな愛里寿の背中に、言葉を投げかけた。

「私にとっては、今でもあなたは太陽よ愛里寿。……だから、いつかあなたの元にも並んでみせる。昔と形は違うかもしれないけど、私の戦車道で、いつか」

「……うん、ありがとう、エリカ……！」

エリカの言葉に振り返る愛里寿の顔は、泣いていた。泣きながら、笑っていた。嬉しさから溢れる、嬉し涙だった。

「それじゃあ……待ってるよエリカ！」

「ええ！ 待ってなさい、愛里寿！」

最後に一言交わすと愛里寿は去っていった。

エリカはその背中を、ずっと見ていた。

「せっんせー……！」

と、そんなエリカの背後から急に飛びかかるものがいた。梨華子だった。

「勝ったよ！ 勝ったよ先生！」

「勝ったんだぜ俺らよー！」

「勝ちました！ 勝ちましたわー！」

エリカはすぐに生徒達にもみくちやにされる。エリカはそれに苦笑いをしつつも、生徒ひとりひとりの頭を撫でていった。

「ふふつ、よくやったわね、あなた達」

「これも先生のおかげです！ ありがとうございます！」

梨華子が目に涙を浮かべながら言う。

「まったくだぜ……！ 逸見先生を信じてついてきてよかったあ……！」

鈴が大泣きながら言う。

「ええ……！ 最初は頼りない人かと思いましたが、本当に良かったですわ！」

理沙が鼻声で言う。

「ええ私もよ。私も、あなた達と出会えてよかった！ よし、今日は奢るわよ！ 焼き肉……はさすがに無理だけど、みんなにラーメンぐらいなら奢ってあげる！」

「本当ですか!? やったあ！」

生徒達のさらに嬉しそうな声がある場を包み込む。その後で、

——お金、どうしよう……。

と一人勢いで言ったことを後悔するエリカだった。



それから数年後……。

エリカは乗用車を降り、とあるホールに呼び出されていた。暗い夜道の中駐車し、そのホールに入っていく。そして、照明のついていないホールの扉を、今開ける。

その瞬間、激しい閃光と炸裂音がエリカを襲った。

『先生！ 誕生日おめでとー!!!』

その大勢の言葉と共に、ぱつとホールの電気が付く。

そこには、大勢の高校生と大量の料理、そしてなにより中央に置かれた巨大なケーキと写真立てが目についた。

その写真立てには、あの大会で優勝したエリカと生徒達が取った記念写真が飾られている。

これは、毎年行われているエリカの誕生パーティだった。

ここにいるのは皆エリカの教え子達で、エリカは毎年こうして祝わ

れているのだ。

その規模は、年を重ねる度に大規模になっていく。

「先生！ お疲れ様です！ さ、こちらへ！」

そう案内したのは、黒森峰の制服を来た梨華子だった。

身長と髪が伸び、より女性らしい姿になっている。

「ありがとう、梨華子」

「おっ！ 逸見先生久しぶり！ 元気してたか！」

「お久しぶりですわエリカ先生」

エリカが連れられたテーブルで二人の大洗の制服を来た生徒が出迎える。一人は耽美な魅力を持つ成長をした鈴、もう一人は大和撫子という言葉が似合うようになった理沙である。

「二人共久しぶり。大洗と黒森峰、この前は激戦だったわね」

「そうなんだよー！ 俺が隊長、理沙が副隊長の大洗は無敵なんだけど、どうにも梨華子の黒森峰だけは苦手なんだよなー。梨華子は副隊長だって言うのによー」

「あはは……ま、うちの隊長は強いですから」

梨華子がまるで自分の事を誇るように言う。どうやら梨華子は黒森峰でも上手くやっているようだった。

「あ、そうだ先生。今度うちの隊長に会ってもらえますか？」

「黒森峰の隊長に？」

エリカは驚く。なぜ黒森峰の隊長が自分に用があるのだろうか。

「ええ、なんでも隊長が戦車道を始めたのは高校時代の先生の姿を見たからだとか」

エリカはさらに驚く。そんな縁があるとは思っても見なかったからだ。

「ええわかったわ。今度紹介して頂戴」

「よかったあ！ 隊長喜びますよこれ！」

「ふふ。それにしてもみんな頑張っているようで何よりね、私もあなた達の先生として鼻が高いわ」

「先生だって凄いじゃないですか！ 先生が中心になって戦車道のリトルリーグが発足されてから、いい噂ばかり聞きますよ。あ！ あ

と島田選手とも！」

エリカはその話を振られると、少し顔を赤らめた。

「わ、私と愛里寿のことが？　な、何のことかしら？」

「またまたとぼけてんじやねえぞー？　島田愛里寿とかなりいい関係だつてのはもっぱらの噂なんだぜー？」

「月刊戦車道にもそんなコラムが書かれてましたわね。なんでも同様までしてるとか。ふふ、実際のところどうなんですか？　エリカ先生？」

「くつ、おのれ月刊戦車道……！　秋山か斑鳩かどっちだあ……!？」

エリカは今にも燃え盛りそうな顔で言う。

そんなエリカを見て、三人は大いに笑った。

その後は、エリカはそれぞれのテーブルを回って教え子全員に挨拶をした。

もう何年もいろんな子を見てきたが、その全員の顔と名前をエリカは覚えていた。

そうして全員に挨拶周りを終えると、エリカは梨華子達のテーブルに戻ってきた。

「お疲れ様です、先生」

「ええ、ありがとうございます梨華子」

テーブルにいたのは梨華子と鈴と理沙だけだった。どうやら他の生徒は別のテーブルで久々に会った友人と話しているらしい。

「……先生、私本当に感謝してるんですよ」

梨華子が急に真面目な笑みで切り出す。エリカは、突然の事に少しだけ驚いた。

「どうしたのよ。突然」

「いえ、やっぱり言っておこうと思って。私は多分先生がいなくても、戦車道をやっていただけでしょう。でも、こんなに戦車道が楽しいと思ってるのは、先生がいたおかげです。先生がいてくれたから、私はこんなにまでなれた。ありがとうございます先生、先生は私の、いえ、私達の太陽です！」

「そうだな」

「そうですわね」

鈴と理沙も、それに同調した。

太陽。その言葉を聞いた瞬間、エリカの目頭は熱くなった。

——ああ、この子達と一緒に戦車道ができて、本当によかった……

！

「あつ、先生泣いてるー！」

「ははっ！ 逸見先生って昔から何気に涙脆いよなー！」

「ふふっ、でも泣いてるエリカ先生も素敵ですわ」

「うっ、うっさいわね……！」

エリカはこうして、あの恋焦がれていた太陽について並ぶことができた。

それは形の違う太陽ではあったが、紛れも無く太陽だった。

そのエリカという太陽の周りには無数の小さな太陽がいくつも並んでいた。

その輝きは、かつてエリカが求めた輝きよりも、ずっと強かった。

あの輝きよりもずっと、ずっと。

——そうだ、今日は愛里寿にハンバーグを作ってあげよう。

エリカは唐突にそう思った。温かい輝きが、エリカに愛里寿にとある言葉を言う勇気を与えたのだ。

——あのときのハンバーグのように美味しいハンバーグを作って、そこで言うんだ。愛してるって。あのハンバーグを、もう一度、味わうために。

おまけ

「エッ、エリカさんが会いに来てくれる!? 本当ですか!?!」

「はい隊長、良かったで——」

「わあああああああああああどうしまししょうどうしまししょう! エリカさんとあつたら何を話せばいいんでしょう!? と、とにかく質問考えて置かないと! そ、そこでいろいろ教えてもらっちゃって……手、手とか握られたりして! うわあああああああああ!!!」

「わあああああああああ隊長が倒れたあああああああ!?!?!?!」

隊長!?! 隊長—————!!!」

こんどこそおわり